

小・中学校における効果的な 英語インプットのあり方に関する研究（1年次）

－ “KYOTO English Shower Project Plan” の開発と提示－

矢野 智子（京都市総合教育センター研究課 主任研究員）

本市外国語教育の充実を図る事業の一つ、「京都イングリッシュ・シャワー・プロジェクト」事業は、学校生活の中で英語に触れる機会をつくり、日常的なインプットを実践する取組である。今年度は、学校と教育委員会（研究課・学校指導課）の連携のもと、具体的なプランを提示し、取組の拡充と質的充実を目指して取り組んだ。

教室で子どもが取り入れた英語インプットは、「気付き→理解→内在化→統合」のプロセスを経てアウトプットにつながるといわれる。しかしながら日常的に英語を使うことがほとんどない日本の環境下では、英語インプットの機会が限られている。そうした状況を踏まえ、本研究では、学校生活において、授業以外の時間に行う英語インプットのための指導計画や教材を提示するとともに、事業を全市に深化・拡充するための体制づくりを行った。そしてその結果、子どもや教員にどのような影響や効果をもたらすかについて検証した。

目 次

はじめに	1
------------	---

第1章 いま、なぜ、English Showerなのか	
第1節 外国語教育の目標と付けたい力	
(1) 外国語教育の目標	1
(2) 外国語教育で付けたい力	2
第2節 京都市英語教育の現状と課題	
(1) 本市小学校における英語教育の現状と課題	2
(2) 本市中学校における英語教育の現状と課題	3
第3節 先行研究から	
(1) 第二言語習得の認知プロセスとインプット	4
(2) 英語絵本の読み聞かせによるインプット	5
(3) 多読によるインプット	6
(4) リスニングによるインプット	7
第2章 “KYOTO English Shower Project” 事業の具現化に向けて	
第1節 研究仮説	9
第2節 本事業の目的と概要、運営方法	
(1) 事業の目的	9
(2) 事業の概要とPDCAサイクル	9
(3) 事業の運営	10
第3節 研究課から発信するプロジェクト・プラン	
(1) プロジェクト・プランの留意点	11
(2) プロジェクト・プランの内容	11

第3章 “KYOTO English Shower Project” 事業の実際	
第1節 事業運営の実際	
(1) 運営体制の実際	13
(2) 情報発信の手だてと実際	13
(3) 発信・交流の手だてと実際	14
(4) 評価・検証の手だてと実際	16
第2節 取組の実際	
(1) プロジェクト・プランの実際	16
(2) パイロット校・実践校における組織の実際	19
(3) パイロット校・実践校における実践事例	20
(4) 研究協力校における実践事例	23
第4章 事業のさらなる充実を目指して	
第1節 事業の成果と課題	24
第2節 今後の発展的可能性と展望	26
おわりに	28

<研究担当> 矢野 智子 (京都市総合教育センター研究課主任研究員)

<研究協力校> 京都市立高倉小学校
京都市立向島中学校

はじめに

京都市では平成9年度から小学校英語活動の実践を開始し、指導法や教材の開発に力を入れてきた。平成20年度からは、移行措置期間を1年間前倒しして高学年で外国語活動を必修化した。更に、小中連携の一環として、同じAssistant Language Teacher(以下、ALT)を中学校とその校区の小学校に配置している。

こうした中、文部科学省(以下、文科省)は平成25年12月13日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」⁽¹⁾を発表し、新たな英語教育の在り方についての方向性を示した。英語教育全体の抜本的充実を図ることをねらいとして、小学校では英語教育の拡充強化、中学校・高等学校では英語教育の高度化がその内容として盛り込まれた。文科省は、2020年の本格展開を目指して、2014年より計画に基づいた体制整備と改革を逐次行う。そして、指導体制を強化することにより、小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実し、児童・生徒の英語力向上をねらっている。

段階的にみると、小学校中学年から週1〜2コマ程度、文科省の示す活動型の授業が始まり、学級担任を中心にコミュニケーション能力の素地を養う指導を行うこととしている。

続く高学年では、外国語活動を週3コマ程度の教科とし、初歩的な英語運用能力を養うこととしている。

小学校の改革を受け、中学校では、授業を英語で行うことを基本とし、身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこととしている。

京都市では、現行の学習指導要領に沿った内容で指導を進める一方、国の動向を注視しつつ、新たな英語教育を意識した取組を推進する。今後、国の改革をスムーズに進めていくためには、それに対応し得る教員の指導力向上のための研修と、条件整備を同時に進めていくことが重要であると考える。

本市では、平成26年度に市独自の実践的英語力育成プログラムとして、四つの事業に取り組む。そのうちの 하나가、平成25年度から始まった“KYOTO English Shower Project”である。これは、授業以外の時間に、英語に慣れ親しむ機会をつくることで、子どもたちが日常的に英語を体感できるようにすることを目的としている。昨年度は、新事業の立ち上げと周知を行い、58小学校と10中

学校で展開した。2年次となる今年度は、パイロット校として14小学校、3中学校(そのうち研究協力校として1小学校、1中学校を指定)を指定し、それ以外の全市小・中学校を実践校として取組を推進する。

これを受け、本研究では、事業の拡充、深化、継続のために、理論的な裏付けのもと、事業面での支えを強化し、内容面での充実を重点目標として取り組む。そこで、事業を各校で実施するための指導計画や教材を提示する。そして各校での取組を全市に発信し、全市で共有するための手だてを考える。更には、学校体制で計画的・継続的な取組を進めた結果、どのような効果をもたらしたかについて検証する。

(1) 文部科学省『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf 2015.3.3

第1章 いま、なぜ、English Showerなのか

第1節 外国語教育の目標と付けたい力

(1) 外国語教育の目標

小学校の外国語活動は外国語活動を新設の領域として平成23年度から、また中学校では外国語科の学習指導要領の改訂を経て平成24年度から、それぞれ実施されている。枠内は、現行の学習指導要領の示す小学校外国語活動、中学校外国語科の目標である。

【小学校・外国語活動の目標】

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。(2)

【中学校・外国語科の目標】

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。(3)

学習指導要領は、小学校ではコミュニケーション能力の素地を、中学校ではコミュニケーション能力の基礎を養うことを目指し、小・中学校間で目標の連携を図っている。小学校に外国語活動が導入されたことで、中学校は、小学校で既に英語に慣れ親しんだ生徒が入学してくることを前提とした指導を行うことが求められる。

（２）外国語教育で付けたい力

外国語教育において、小学校段階で付けたい力とは何か。目標にあるとおり、コミュニケーション能力の素地とは、外国語活動を通して養われる言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを指す。小学校の外国語活動では、中学校での外国語科の教科学習につながるコミュニケーション能力の素地を育成するために、場面に依拠したコミュニケーション活動を体験することを重視している。したがって、外国語活動では表現の定着を第一の目的としない。知識のみによって理解を深めるのではなく、体験的に「聞く」「話す」ことを通して音声や表現に慣れ親しむことを第一義とする。そのため、多くの語彙や表現を覚えたり、文法の仕組みや文構造などの抽象的な概念を理解したりすることは求められていない。

小学校のカリキュラムでコミュニケーションそのものを扱う教科・領域は、外国語活動においてほかにはない。コミュニケーション能力の素地は、子どもの関心・意欲・態度を行動観察などで見取るため、可視化しにくい点がある。しかし、これを中学校から始まる教科学習につながる大切な力ととらえ、意識して指導する必要がある。

これに続く中学校段階で付けたい力とは何か。中学校では、小学校で育まれた素地の上に、コミュニケーション能力の基礎を育成することをねらう。その際、文法はコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、言語活動と一体的な指導を行うよう改善を図る必要がある。中学校外国語科では、初歩的な英語を聞いて理解したり、自分の考えを話したりする力が求められる。また、初歩的な英語を読んで書き手の意向を理解したり、それを使って自分の考えなどを書いたりする力を付けることも求められる。このように、中学校では「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能を総合的に育成することで、コミュニケーション能力の基礎を育てることをねらう。また中学校では、小学校で外国語活動を経験した生徒を受け入れ、三年間で、英語で行われる高校の授業に順応できる生徒を育てる必要がある。

更に、その先の高等学校段階では、コミュニケーション能力の育成を目指し、思考力・判断力・表現力などを育む観点から言語活動の充実を重視するとともに、授業は英語で行うことを基本としている。

以上のように、小・中学校から高等学校で付けたい力は、コミュニケーション能力の観点で一貫しているといえる。更に、小学校・中学校・高等学校の連続性は、生涯教育へとつながっている。従って、小・中学校は、英語教育の連続性や見通しを意識しつつ、領域と教科の枠組みの違いを超えて小中連携が進められるよう、双方が手を携えて取り組む視点を忘れてはならない。

京都市は、平成17年度に、小中連携英語教育の中学校卒業段階での目標として、枠内の「京（みやこ）・英語スタンダード」を定めている。

- (1) 英語でコミュニケーションをしようとする意欲がある。
 - (2) 英語学習を通じて、多様なものの見方や考え方を理解し、国際協調の精神の素地が育っている。
 - (3) 外国人に英語で話しかけ、必要な情報を教えることができる。
 - (4) 英語をはじめとする様々な言語や文化に興味を持ち、自ら進んで外国語やそれに関連する学習を継続しようとする態度が育っている。

今後、国の英語教育改革が進められていくことを踏まえ、京都の子どもがグローバル社会を主体的に生きる上で必要な資質・能力の一つとして、京・英語スタンダードにあるような実践的な英語コミュニケーション力を育てていく必要がある。

第２節 京都市英語教育の現状と課題

（１）本市小学校における英語教育の現状と課題

文科省が行った調査によれば、全国の小学生は「英語の学習が好きである：76%」(5)、「英語が使えるようになりたい：91.5%」(6)と回答するなど、子どもは英語に対して意欲的に取り組んでおり、外国語活動導入には一定の成果があったことがうかがえる。

京都市では、平成23年度から3年間にわたって、全小学校に向けて、管理職と主任を対象に、独自に実態調査を行ってきた(7)。そこで外国語活動の実施状況とその経年変化から検証を図っている。表1-1は、実態調査からの抜粋である。

表1-1 京都市小学校における外国語活動の経年変化（％）

アンケート 質問内容	平成 23 年度 n=173	平成 24 年度 n=170	平成 25 年度 n=168
外国語活動の授業はとてもうまくいっている・まあまあうまくいっている	97.1	91.8	93.5
外国語活動の授業体制は十分・どちらかといえば十分である	71.6	84.1	97.4
授業外の英語に関わる取組を実施している	24.9	24.1	18.5

表1-1にあるように、「外国語活動の授業はうまくいっているか」の質問に対し、若干の落ち込みは見られるものの、90.0%以上が「とてもうまくいっている」「まあまあうまくいっている」と回答していることから、安定して授業が進められているといえる。また、学級担任の授業体制は年々整ってきている一方で、学校独自の英語に関わる取組は年々、減少傾向にあるといえる。

表1-2は、平成25年度京都市外国語活動実態調査(8)によるALTとのティーム・ティーチング（以下、TT）の実態についての結果である。

表1-2 平成25年度京都市外国語活動実態調査(n=168) (%)

アンケート 質問内容	25 年度
ALT との TT がうまくいっている・どちらかというとうまくいっている	83.9
ALT との打合せ時間が十分でない・どちらかというとうまくない	47.7

ALTとのTTがおおむねうまくいっている学校が、多数を占める。「うまくいっている」と回答した学校の記述回答からは、「ALTが高学年の担任以外の教職員や他学年の子どもとの交流を活発に行っている」「授業以外の時間に、ALTと積極的にコミュニケーションを図る場を設定している」一方、TTがうまくいっていないという学校では、「高学年以外の子どもとALTとの交流が進みにくい」「学校全体で外国語活動の研修の機会がなかなか設定できない」などの課題が挙げられた。

更に、ALTと十分な打合せ時間を確保しにくい状況にある理由として、学級担任が多忙であることが挙げられた。

ALTに求められる役割は、回答の多かった順に、「発音の見本」「活動の見本」「児童と英語で会話」「自国の文化を伝える」「自然な英語の使い方の提示」であった。

平成23年度の京都市外国語活動実施状況調査(9)によれば、学級担任の教室英語力について「十分でない・どちらかといえば十分でない」という回答は45.7%であった。記述回答からは、「英語の発音に自信がもてない」、「ALTと打ち合わせをする英語力がない」などの困りや悩みが明らかになり、教室英語に不安を感じている教員が少なくないことがわかった。

これらの調査結果をまとめると、本市では、学級担任が中心となって進める外国語活動の体制が一定整い、授業の手応えも得られるようになってきたと考えられる。その一方で、外国語活動を支える学校体制づくりや、ALTとのTT体制、学級担任の教室英語力向上などの課題や、授業以外で英語の取組を実施する学校が減少していることが明ら

かになった。

更にこの調査から、外国語活動を充実させるために学校現場が最も必要とする条件整備が「ALTの時間増」であることがわかった。また、学校はALTに対して、異文化理解の点とネイティブ・スピーカーによる英語インプットの点で、大きな期待を寄せているといえる。

（２）本市中学校における英語教育の現状と課題

文科省が平成24年度に行った小学校外国語活動実施状況調査によると、中学生の約8割が「小学校外国語活動で行ったことが、中学校外国語科で役立っている」と回答している(10)。このことから、外国語活動の必修化を、当事者である子どもが肯定的にとらえていることがわかる。

そこで本研究では、平成24年度に京都市内中学校を対象に行った外国語実施状況調査と指導主事への聞き取り調査から、市の中学校英語教育の現状と課題について考察する。

表1-3は、小学校での外国語活動導入以降に行った調査をもとに、筆者がまとめたものである(11)。

表1-3 外国語活動導入以降の中学校の現状 (n=73) (%)

アンケート 質問内容	平成 24 年度
外国語活動をふまえた指導の工夫が見られるようになった	54.7
小中連携に関する取組が一層推進された	50.7
校区小学校対象に英語の授業参観や公開授業を行っている	64.4
校区小学校の外国語活動の授業参観や公開授業に参加している	56.2
外国語活動の導入の成果や変容が見られた	71.2
中1授業で一単元中に「読む」活動を取り入れている	97.3
中1授業で一単元中に「書く」活動を取り入れている	94.5
中1授業で一単元中に「聞く」活動を取り入れている	100.0
中1授業で一単元中に「話す」活動を取り入れている	98.6

「校区小学校対象に英語の授業参観や公開授業を行っている」と答えた中学校の割合は64.4%で年平均2.1回実施している。また、「校区小学校の外国語活動の授業参観や公開授業に参加している」と答えた中学校の割合は56.2%で、年平均1.6回小学校に出向いている。

外国語活動の導入の成果や変容の具体的な内容については、数値の高い順に、「英語の音声への慣れ親しみ」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「英語への抵抗感の少なさ」「英語で活動を行うことへの慣れ」が挙げられた。

また、中学1年生の授業で、一単元中における四技能の活動の実施頻度は、「読む」活動が97.3%、「書く」活動が94.5%、「聞く」活動が100.0%、「話す」活動が98.6%であった。

これらの調査結果から、中学校教員は、外国語

活動の導入の手応えを感じていることがうかがえる。したがって、外国語活動が導入されてから、教員が小中間連携の必要性を意識し始めてきており、中学校教員は、四技能の育成を意識した授業づくりをしていることがわかる。このことから、小中連携はゆるやかであるが確実に進んできているといえる。しかしながら、中学校の課題は小中連携だけではなく、中学卒業時点でどのような生徒が育っているかを注視しなければならない。

文科省の「グローバル化に対応した英語教育実施計画」では、中学校の具体的な指標として次の二点が示された。

- ・授業は英語で行うことを基本とし、内容に踏み込んだ言語活動を重視する。
- ・身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う。

(12)

これらの点から国は、英語教育の今後の方向性として、現行学習指導要領に示されている英語教育よりも更に高度の目標レベルを設定しようとしていることがわかる。したがって、英語教育改革に対応し得る教員の授業力向上は喫緊の課題であるといえる。今後、新たな英語教育へとつなぐために、本市では授業の質的改善に向けて次の四点を軸として取り組む。

- ・本時の目標、評価、評価方法を設定した授業構築
- ・CAN-DOリストの整備
- ・「読むこと」の言語活動の充実
- ・英語を使った授業と小・中・高等学校連携

中学校英語科教員は、入口では小学校の外国語活動を受けた導入を行い、出口では、高等学校の「授業は英語で行うことを基本とする」授業につなげることが求められる。英語で授業を行うことは、生徒を英語に浸らせ、実際のやり取りを示すために欠かせない指導力の一つであるが、教師が一方的に英語を話すのではなく、子どもが積極的に英語を使う機会を設定することが求められる。

以上のように、本項では、本市小・中学校の英語教育の現状と成果、課題を概観してきた。これらを把握し、検証・改善を行うとともに、今後の国の英語教育の大きな変化を注視しつつ、小・中学校の子どもに必要な力を確実に身に付けられるようにしていく必要がある。

第3節 先行研究から

(1) 第二言語習得の認知プロセスとインプット 植物の成長にとって光や水が大切であるのと同

じように、第二言語を習得するためには、インプットが不可欠である。効果的に言語を習得するためには、子どもは、継続的に言語インプットに触れることが大切であると考ええる。

本節では、第二言語習得理論の知見を生かし、第二言語の認知プロセスとインプットについて述べ、主に、英語絵本の読み聞かせと、多読の取組、リスニング教材を活用した取組の視点から、その効果について考察する。

図1-1は第二言語習得の認知プロセスを示したものである。

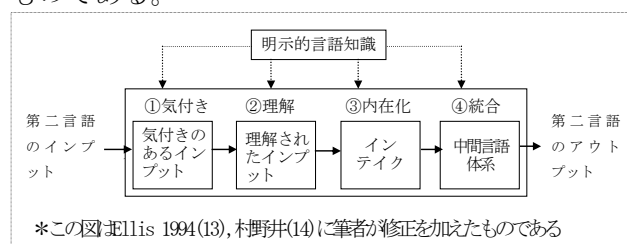


図1-1 第二言語習得の認知プロセス

図1-1にあるように、第二言語をアウトプットするためには、「①気付き→②理解→③内在化→④統合」という認知プロセスを経る。それが最終的にはアウトプットにつながる。認知プロセスの四段階の概要は以下のとおりである。

【①気付き】

子どもがインプットにある言語項目に気付く段階を表す。意図的な気付きと偶発的な気付きの二種類があり、いずれも第二言語習得上、重要な働きをする。気付きなしの言語習得は不可能である。

【②理解】

子どもが気付きのあるインプットを理解している状態（理解されたインプットに変容する段階）を表す。

【③内在化】

理解されたインプットが、子どもの知識として取り込まれ、定着する段階を表す。

【④統合】

内在化された知識がより深く子どもの中に組み込まれる段階を表す。

これら一連のプロセスを通して、インプットがアウトプットにつながり、言語運用能力が身に付くといえる。Krashenの「第二言語習得には理解可能なインプットが不可欠である」(15)という説は、第二言語習得に関する先行研究で既に明らかになっている。

では、質的・量的に適切なインプットとはどのようなものか。次ページ右上枠内は、村野井が示すインプットの四つの条件とその概要である。

【①理解可能性】

子どもに、今より少し上のレベルの理解可能インプットを大量に、継続的に与える。完全な理解を求めず、全体の概要をとらえさせる。

【②関連性】

子どもの日常生活や興味・関心と関連したインプット内容を選んで与える。

【③真正性】

真正性、すなわち現実の言語使用を目的として使われているかどうかを精査し、現実的なコミュニケーションに近づけるようにする。

【④音と文字のインプット】

音声と文字の両方をバランスよくインプットする。
(16)

以上のことから、インプットは段階を踏まえながら、量を保障すると同時に、良質のインプットに継続的に触れ、内容を理解しながら学びを深めていくことが、効果的であるといえる。

インプットはやがてアウトプットにつながるものである。Swainは、「理解可能なインプットは習得に必要ではあるが、十分ではない」(17)と主張し、学習者に深い言語処理を求めるアウトプットの必要性を論じている。なお、本研究ではインプット理論を中心に展開するが、インプットの段階で完結させてしまうのではなく、インプットの効果をその先のアウトプットにつなげられるように、授業と関連させながら取り組むことが大切であると考ええる。

(2) 英語絵本の読み聞かせによるインプット

文科省は、耳からのインプットの大切さについて、「聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児童にさせることが大切である」(18)としている。その上で、「児童に聞かせる工夫の一つとして、絵本の読み聞かせが考えられる」(19)としている。枠内はその理由である。

- ・「聞いてわかる」体験をさせやすい。
 - ・選ぶ絵本の内容によって、現実には起こり得ないことを絵本の世界で体験することができる。
 - ・昔話の中には、生きていく知恵や教訓的なことが組み込まれている場合もある。
- (20)

英語絵本の読み聞かせについて、文科省は、子どもが外国語活動の目標にある体験をする上で、効果があると考えている。

そこで本研究では、英語絵本の読み聞かせを通

して、子どもに適切なインプットを与えることができるのではないかと考え、枠内に示した五つの視点からその可能性を検討する。

- ①絵本から得られる効果
- ②読み聞かせに適した絵本の条件
- ③絵本選びの留意点
- ④読み聞かせのステップ
- ⑤絵本の読み聞かせにおける文字の扱い

第一に、英語絵本の読み聞かせの効果について、松浦、伊東らが第5学年を対象に調査研究を行ったところ、「多くの児童は挿絵を手がかりに語られるストーリーを予測しながら聞き、次第にストーリーの展開を理解する力をつけることができるようになった」(21)という結果が導き出された。言いかえると、仮に、子どもが英語の音や文字を理解できなかったとしても、挿絵を見ることによって内容を類推し理解することが可能であるということになる。

インプットの視点に関連して、英語絵本の読み聞かせは、理解可能なインプット量を継続的に増やす活動として、非常に有効であると考ええる。

第二に、枠内は、英語の読み聞かせに適した絵本について、リーパーが示した八つの条件である。

- ① リズムがあり、ライムや日常使われる易しい単語が入っている。
 - ② 文とイラストが合っている。
 - ③ 表紙やタイトルから内容が予想できる。
 - ④ 同パターンの表現が繰り返し出てくる。
 - ⑤ 起承転結がある。
 - ⑥ 文字やスペースが視覚的にはっきりしている。
 - ⑦ 子どもの生活体験に近い。
 - ⑧ 子どもの読む力に近い。
- (22)

子どもにとって、第二言語を理解することは、母語を理解する以上に負担が大きい。したがって、子どもが、英語絵本の読み聞かせを完全に理解することは不可能であると考ええる。しかし絵本は、挿絵からの視覚情報が伴うことで、絵で場面や登場人物の動きを類推することができ、それが内容理解につながると考える。

更に、子どもにとって身近で日常的なストーリーが、単純でリズムカルな繰り返しとともに展開されれば、子どもは容易に類推して内容を理解することができる。また、繰り返しを通して、表現やリズムを覚えて一緒に言うことがで

きるようになるであろうと考える。

以上のように、リーパーが示した八つの条件を全て網羅した教材を探すことは難しいと思われるが、英語絵本を選ぶ際には、留意すべき大切な視点であると考ええる。

第三に、英語絵本の選ぶ際に、レクサイル指数（本の難易度と読書力を示す指数）の活用が挙げられる。大島は、英語絵本を選ぶ際に、「読み手と本のレクサイル指数を一致させることで、その本を少なくとも75%理解できる」(23)と述べ、読書が楽しいと感じる境界線を示した。レクサイル指数は全文中の語彙、語数、文構造の使用頻度などをコンピュータで測定して決められている。したがって、指数から本の難易度を客観的に知ることができるのが利点である。しかし、分析不可能な文体があったり、語彙が比較的易しくても、内容的な難しさを考慮しにくかったりするなどの短所がある。したがってレクサイル指数は、選書の目安として参考程度に考慮するのがよいと考える。

第四に、英語絵本をどのような段階を踏まえて読み聞かせをすればよいかについて、Hallは枠内の三段階を示し、一冊の絵本をどう読み聞かせるかについて示している。

【①Pre-storytelling・・・興味付け】

読み聞かせ前、物語を理解するための背景知識を入れたり、子どもに内容を予想させたりして興味付けを行う。

【②Story-telling・・・興味と理解】

実際に読み聞かせをする。最後まで一とおり読み、時折、質問を投げかけて子どもに答えを求める時間をはさむか、読み手次第である。特に初回の読み聞かせで、場面のつながりや物語の展開に興味をもたせたい場合、過度の質問や説明は話の流れを止めてしまう(25)ことも考えられる。

【③Post-storytelling・・・子どもの興味を深める】

読み聞かせ後、内容に関連した活動を行う。英語絵本の中に出てくる外国文化と日本文化を比較したり、絵本の語彙を使った活動（伝言ゲーム、問答、探し、役割読み、カード並べ、声出し読みなど）を行ったりして、絵本の世界に親しめるようにする。

* 枠内はHall(24)、下線は松岡(25)を筆者がまとめた。

英語絵本の読み聞かせによるインプットは、これらの一連の段階を踏む中で、その質を変化させながら、子どもの中に組み込まれていくといえる。この段階を必ず踏まなければならないというものではない。ただ単に読み聞かせをするだけでも十分にインプットの機会となり得るが、段階を踏んで、活動を工夫することで、子どもは更に英語の

リズムやストーリーの面白さを堪能することができると考える。

第五に、英語絵本の読み聞かせ場面における文字の扱いについて述べる。リヴァースは音声による導入から文字の提示までの時間が長いと、英語特有の発音とイントネーションが体得しにくかったり、音を不正確にメモして覚えてしまったりすることを指摘する(26)。それならば、低学年の子どもにも、文字のある絵本を与えて読み聞かせをし、自然に文字に触れられるような環境を整えれば、文字が読めない子どもに負担なく、音声、意味や文字をインプットすることが可能となると考える。

畑江は、低学年では読み聞かせを中心に、中学年では読み合いを、高学年では音声、意味や文字を同時に示しながらぞり読みをするなど、発達段階を踏まえた読み方を提案する(27)。

そこで、どの学年でも一律な形で読み聞かせをするのではなく、子どもの発達段階や実態に合わせた段階的な読みの形態を模索していくことが大切であると考ええる。

このように、子どもに負担なく、自然に文字に触れられるような形で段階的なインプットを行うことにより、中学校英語への前向きな動機付けができるようにする必要がある。

これら五つの視点を踏まえると、英語絵本の読み聞かせを通して、インプットの量を増やすだけでなく、質の伴ったインプットを与えることが可能となると考える。そのためには、指導者が、絵本の内容や英語の難易度を考慮して選ぶとともに、読み聞かせの仕方や文字の取り扱いについて工夫することで、インプットの効果を高めていくことが求められる。

(3) 多読によるインプット

多読とは「学習者が自分にとってやさしい英語の本を楽しく読んで、読書速度を上げ、読書を流暢にできるようにすること」(28)と定義付けられている。その目的とは、「学習者が読解力を高めるのを助けること」(29)とされる。本の難易度は、SSS英語多読研究会と日本多読学会による読みやすさレベル(YL)が設定されている。日本人の英語学習者に合わせて、本の難易度が、YL0.0からYL9.9までの数値で示されており、YLの数値が小さいほど読みやすいことを表している。

はじめに、多読(Extensive Reading)と精読(Intensive Reading)との違いについて明らかにする。表1-4は、多読と精読を比較したものである。

表1-4 多読と精読の比較

	多読(Extensive Reading)	精読(Intensive Reading)
目的	読み方を学ぶ	学ぶために読む
内容	既習の言語知識が実際にどのように使われているかを知る	語彙、文法などの言語知識を集中的に学ぶ
読む量	多い	少ない
語彙	既習の言語要素がほとんど	新出の言語要素を多く含む

中学校の授業では、各單元ごとに新しい文法事項や言語材料を集中的に学ぶ精読が中心である。そこに多読を取り入れることで、授業で学んだ言語知識をさらに深めることができると考える。したがって、多読と精読は互いに補い合う存在であるといえる。

次に、多読のインプット量について考察する。日本では、多くの英語に触れる機会は限られている。「中学・高校と6年間英語を学んだけれど身に付かなかった」との声も聞かれる。稲垣は、中・高の英語教科書の総語数約3万語が、多読用教材（レベル1, 2）を約5冊読む量に相当し、授業に多読を取り入れた場合、5週間で達成できると述べている（30）。したがって多読は、不足しがちなインプットを補うための有効な手段であるといえる。

最後に、多読の長所・短所について挙げる。佐藤が中学2年生を対象に多読を実施したところ、生徒の定期試験の成績に有意な伸びが見られた。さらに生徒はリーディング・スキルの伸長を実感し、読書を通して忍耐力・集中力・読書習慣がついたと感じていることがわかった（31）。

増見らの調査によれば、学習者の習熟度レベルにより多読の効果は大きく異なり、特に成績中位群の生徒にもっとも有効であることが明らかになった（32）。

以上のように、多読は、程度の差こそあれ、子どものインプット量を増やし、英語力向上に効果的にはたらくことは明らかである。

多読の取組を効果的に進めるため、指導者の役割と留意点を枠内にまとめた。

【事前】

- ・全体指導で、ルールの共通理解を図る。

【活動中】

- ・個人で静かに読ませる。
- ・事前レベルチェックを参考に、生徒のレベルに合った本を選べるように声かけをする。
- ・生徒の相談や質問に応じる。

【事後】

- ・活動後、記録カードに書かせ、点検する。
- ・自主的に読もうとする生徒のニーズがあれば、時間外の貸出に対応する。

さらに、三上が「適切な目標設定をすることによって、子どもは興味をもって継続的に努力することが期待できる」（33）と述べるように、指導者は、子どもの動機付けを高めることが重要である。

その一方で、継続的に多読に取り組むためには、図書の充実が必要条件となる。多読の形態や子どもの発達段階により異なるが、中学校で200冊を超える書籍が必要ともいわれる。なぜなら、先述の読みやすさレベル（YL）を参考に、子どもに合ったレベル別の書籍が必要だからである。したがって、資金面での条件整備が必要であることが短所といえる。そのため、市立図書館の活用も視野に入れ、書籍の確保を考える必要がある。

以上の点を指導者間で共通理解した上で、多読に取り組むことが求められる。

（４）リスニングによるインプット

効果的なインプットの与え方について、図1-2にあるリスニングの指導プロセスから考察する。

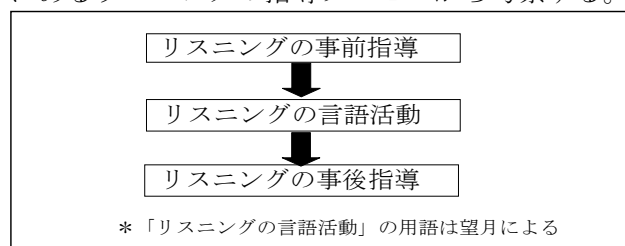


図1-2 リスニングの指導プロセス

【リスニングの事前指導】

事前に、子どもにリスニングに対する目的意識と意欲をもたせることが大切である。望月は、「ある程度予測しながら聞くことができるように、生徒の背景的知識（スキーマ）を活性化する」（34）と述べている。そのための準備をすることで、子どもが教材に向かう際の不安を取り除くことができると考える。

【リスニングの言語活動】

リスニングの手法について、望月が挙げた五点を枠内に示した（35）。

- ①集中的リスニング・・・繰り返し聞き、リピートすることにより、個々の要素を聞き取る。
- ②選択的リスニング・・・概要や要点をつかむため、与えられた中から必要な情報だけを聞き分ける。
- ③包括的リスニング・・・話の概要や要点を聞き取る。
- ④相互作用的リスニング・・・推測・予測・判断の必要な思考力を働かせて聞き取る。
- ⑤対人的リスニング・・・話し手に対し、聞き手が反応しながら聞くなど、双方向で行う。

子ども自身がプロセスを振り返ることができるよう、リスニングの目標を明らかにし、スモール・ステップで課題を示すことで、子どもに成就感や達成感を味わわせる。更には、子どもに対する興味付け・動機付けを行い、リスニングの手法を効果的に使い分けながら、聞く力の育成に結び付けることが重要である。

【リスニングの事後指導】

事後には言語活動を振り返り、重要事項を定着させ、リスニングを他の言語活動へと発展させることをねらう。内容理解がほぼできた時点で、シャドウイング(音声を聞いた後すぐに復唱する手法)やロールプレイを行うことも可能である。このように段階を踏んだリスニング指導を行うことが大切である。

以上のような三つのプロセスを踏まえて、リスニング指導を行う際、望月は場合によって「集中的リスニングに専念させるには音声だけを聞かせるほうがよい」(36)と述べている。通常のコミュニケーションには欠かせない視覚情報などの非言語情報をあえて省くことで、音声のみに集中した難易度の高いリスニングが可能となるからである。

また、リスニングを効果的に使ったインプットの実践を目指すのであれば、ひたすら聞かせっぱなしの指導を行うだけでは子どもの力はつかない。望月は、子どもが「気が付いたら何度も聞いていた」という状況を作り出すために、活動に変化をもたせることこそ成功のポイントであると述べている(37)。これまで、リスニングの指導プロセスや手法を概観してきた中でいえるのは、明確なねらいのもと、段階的に、必要に応じて意図的な工夫を行うことが重要であるということである。そしてそれがインプットの効果をより確かなものとすることができると考える。

次章では、インプット理論に裏付けされた具体的なアプローチを取り入れた“KYOTO English Shower Project”事業について説明する。

- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』2008.8 p.7
- (3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008.7 p.7
- (4) 京都市教育委員会『「ALT を活用した小中連携英語教育の充実・推進」～英語が使える「京都っ子」の育成にむけて～」2005.4
- (5) 文部科学省 国立教育政策研究所『平成25年度全国学力・学

習状況調査報告書クロス集計』2013.12 http://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/data/research-report/crosstab_report.pdf2015.3.3

- (6) 文部科学省『英語教育の在り方に関する有識者会議(第3回)配付資料3-2「外国語活動の現状・成果・課題」』2014.4 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/05/01/1347389_01.Pdf 2015.3.3 p.7
- (7) 京都市『外国語活動実施状況調査』2008-2010
- (8) 前掲(7)
- (9) 前掲(7)
- (10) 前掲(6) p.7
- (11) 京都市『外国語実施状況調査』2009
- (12) 前掲(1)
- (13) Ellis, R. (1994) The study of Second Language Acquisition. Oxford:Oxford University Press. p.267
- (14) 村野井仁他『実践的英語科教育法 統合的コミュニケーション能力を育てる指導』成美堂 2001.9 p.45
- (15) Krashen, S. D. (1985). The input hypothesis: Issues and implications (Vol. 19850). London: Longman. p.4
- (16) 村野井仁『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店 2006.4 pp..28～31
- (17) Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & Seidlhofer, B. (Eds.), Principle and Practice in Applied Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press. pp..125～144
- (18) 文部科学省『“Hi, friends! 2” 指導編』2012.4 p.32
- (19) 前掲(18) p.32
- (20) 前掲(18) p.32
- (21) 松浦友里, 伊東英「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」『岐阜大学カリキュラム開発研究, 29(1)』2012 pp..94～101
- (22) リーパーすみ子『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房 2011.1 p.35
- (23) 大島英美『声に出して読む英語絵本初めてのリードアラウド』中央公論社 2011.4 p.28
- (24) Hall, J. M. (2009) Ideas for using English picture books for the new foreign languages activities in Japanese elementary schools. pp..34～38
- (25) 松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』日本エディターズスクール出版部 1987.9 pp..18～22
- (26) ウィルガ・M. リヴァーズ『外国語習得のスキル その教える方第2版』研究社出版 1987.12 p.240
- (27) 畑江美佳「小学校外国語活動における英語絵本の活用 コミュニケーション能力の素地を育むために」四国英語教育学会紀要(32) 2012 pp..17～28
- (28) 国際多読教育学会『多読指導ガイド』2011 p.1

- (29)前掲(28) p. 1
- (30)稲垣スーチン・稲垣俊史「日本の大学におけるグレイディッド・リーダーズを用いた英語多読授業の効果に関する実証的研究」『言語と文化』2008. 3 pp. 41～43
- (31)佐藤大介・橋内幸子「中学校での多読指導実践が及ぼす影響に関する一考察」『中国学園紀要(5)』2006. 6. p. 75
- (32)増見敦・石川慎一郎「英語多読活動に対する学習者の習熟度適性：高校段階における指導実践をふまえて」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集(9)』2012. 10. p. 29
- (33)三上由香「多読活動における目標設定が学習者の動機づけと自律に与える影響」『中部地区英語教育学会紀要(42)』2013. 1 p. 251
- (34)望月昭彦編著『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店 2010. 10 pp. 116～117
- (35)前掲(34) pp. 111～116
- (36)前掲(34) p. 119
- (37)前掲(34) p. 120

第2章 “KYOTO English Shower Project” 事業の具現化に向けて

第1節 研究仮説

前章では、英語絵本の読み聞かせや多読、リスニング教材の活用など、聞いたり読んだりする活動、すなわちインプット中心の活動を論じてきた。「話す力の育成にはその基本として聞く力の育成が不可欠である」(38)と西垣・中山が述べるように、話すことと聞くことは表裏一体である。英語を話す力は英語学習者の最終目標として挙げられることが多いが、インプットは、聞く力を育てるだけでなく、アウトプットにもつながる大切な力である。枠内はそのことを踏まえて設定した研究仮説である。

①（運営体制の確立）

学校と委員会の連携を図るための体制を確立することで、事業を全市に拡充することができるか。

②（内容の提示）

小・中学校において、授業以外に英語インプットの機会を日常的につくことで教育的効果をもたらすことは可能か。またどのような教材や指導計画が考えられるか。

①で委員会は、事業を全市展開するために必要な体制を確立し、目標達成に向けて、先を見通した事業運営ができるような仕組みを考察する。学校はこれを受けて、「いつ、どのように取り組むか」について主体的に考え、実施できるようにする。

②で委員会は、理論的裏付けのある教材や計画

の具体を示す。学校は、これらの教材を参考にしながら、それぞれの実態や子どもの発達段階を考慮して実施し、取組の成果と課題を検証する。

第2節 本事業の目的と概要、運営方法

（1）事業の目的

本市では「平成26年度 学校教育の重点」の基本方針のもと、平成30年度から完全実施となる新学習指導要領を見据えた形で外国語教育に力を入れ、複数の事業展開に取り組む。そのうちの 하나가「京都イングリッシュ・シャワー・プロジェクト」事業で、子どもが日常の学校生活の中で英語に触れる機会を充実させることを目的としている。

平成26年度は、研究課が学校指導課の事業を請け負う形で運営に参画する。学校・学校指導課・研究課が連携することで、各校の取組を活性化させ、さらには全市の取組の質的充実を図ることを目指す。

（2）事業の概要とPDCAサイクル

1年次、イングリッシュ・シャワーの取組は、各校に委ねられ、学校が独自に実践を進めていた。そのため、情報提供を受けたり、他校と交流したりすることはなかった。

そこで2年次は、学校・学校指導課・研究課が連携し、図2-1のPDCAサイクルにあるように、体制を充実させ、取組を深め、拡げることを目指す。

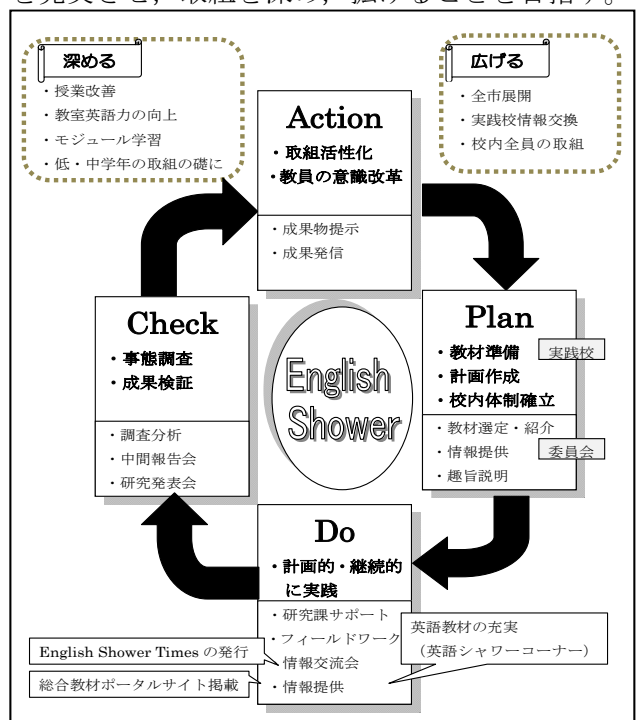


図2-1 事業体制とPDCAサイクル

【Plan】

学校が取組を進めるために、委員会はそのサポートを行う。情報交流会を開き、事業の趣旨を説明し、取組の情報提供を行う。教材紹介や選定のポイント、実践例の紹介など、校内の取組に生かすことのできる具体的な内容を提供する。

それを受けて、学校は校内体制を確立し、教材を準備し、取組の年間計画を作成する。事前調査などを通して、自校の子どもの実態を把握した上で、取組を進める。

【Do】

学校は、子どもが日常的に英語に触れることができる取組を計画的・継続的に実践する。

委員会は、パイロット校・研究協力校・実践校と協力体制をとり、フィールドワークを行う。学校の実態を踏まえ、個別の相談に対応する。中間期には、パイロット校・研究協力校・実践校を対象に、情報交流会を行い、中間報告や情報提供をする。アンケート調査の結果を報告したり、各校で取組の状況や悩み、成果と課題を交流したりして、取組の一層の充実を目指す。

更に、常時交流や情報提供を行うために、イントラネットの掲示版から電子新聞を発行し、各校の実践紹介や教材情報を全市に発信する。

また、総合教育センター館内にある教材開発室Ⅱに「英語シャワーコーナー」を常設し、英語教材の情報提供や取組の具体を展示し、事業の推進を図る。

【Check】

実態把握と成果・課題の検証のため、委員会は学校に協力依頼をし、調査を行う。その結果分析や成果、課題について情報交流会や研究発表会で報告する。

【Action】

委員会は、事業の成果と課題を踏まえ、“KYOTO English Shower Project Plan”をまとめ、全市に発信する。学校との協力体制のもと、条件整備や情報提供、交流を行う。各校が自立した取組を継続して行うことを目指し、学校の取組を支える。

（３）事業の運営

先述のように、英語インプットは、始めてすぐに効果が出るとは限らないが、継続的に取り組んでこそ、その効果が期待できる。

学校は毎日慌ただしく動いている。教員は日々の授業準備、学級経営、生徒指導、保護者対応、学校行事、事務処理とやらねばならないことに追われ、多忙な日々を過ごしている。

そのような学校の実態を踏まえ、本事業の趣旨である「子どもに毎日、英語のインプットを継続的に行う」場合、学校体制での仕組みづくりと、それを支える支援体制の確立が不可欠である。前項で挙げたとおり、事業を運営する上で、学校体制とそれを支える支援体制がいかにあるべきかについて述べる。

①学校体制のあり方

Hordは、学校が「共通の目的を目指し、協力して活動する教育者たち」(39)であることが有力な戦略であるとし、組織を構成する要素を五つ挙げている。

- a 信念・価値・ビジョンの共有
- b 共有的・支援的なリーダーシップ
- c 集合的な学習とその応用
- d 支援的な状態
- e 個人的な実践の共有

(40)

組織の一部の者だけが動く取組としてしまうと、関わった教員の異動によって取組が衰退してしまい、各校の長期的なめあての達成につながらない可能性も出てくる。自校の子どもの実態を踏まえ、計画的・継続的に取組を進めるためには、教職員・子どもの継続のモチベーションを維持することも視野に入れなければならない。

学校にはそれぞれの学校が目指す教育目標があり、全ての教育活動を通してその目標達成を目指す。管理職は学校教育目標の中に、本事業を通してどのような子どもの姿を目指すのかについて盛り込み、教職員と共通理解を図り、事業を進めていく必要がある。

②委員会の支援体制のあり方

では、事業を実施する学校体制を支援するために、委員会は何に留意した支援体制を整えるべきであろうか。上記Hordの五要素のd, eにある「支援」と「共有」から留意すべきことを述べる。

センゲは、継続的な協働と集団の力によって環境をつくるのには時間がかかるが、振り返りの場をもつ実践ができるようになってはじめて効果を表す(41)と述べている。そこで、学校の協働を支援するための仕組みとして、三点を枠内に示し、図2-2に図式化した。

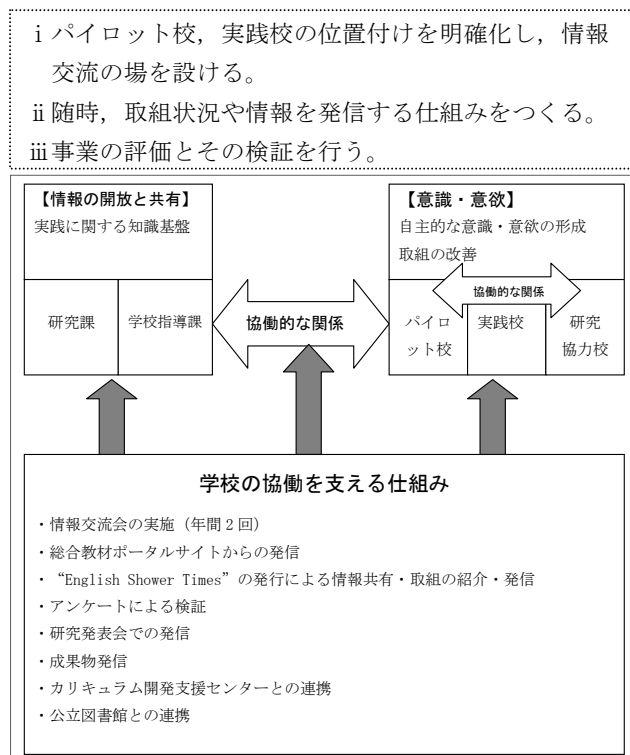


図2-2 情報の交流と共有化の仕組み

本事業において、パイロット校は、取組推進のけん引役としての役割を担い、実践校はパイロット校の取組を参考として、自校の取組を進める。研究協力校は、先進的・発展的な取組を進め、全市にその進捗状況や結果の報告と検証を行う役割を担う。

i 情報交流の場を設ける

事業の円滑な実施のため、年間二回の情報交流会を設定する。

第一回情報交流会では、事業の趣旨を伝え、校内体制の確立に向けて、各校が年間計画を作成して円滑に実施することを目的とし、以下の点について周知する。

- ・事業の目的と趣旨
- ・インプット理論について
- ・具体的な取組の提案
- ・学校体制づくり
- ・教材紹介

英語教材の業者と連携して、教材展示ブースを作り、紹介を行う。その理由としては、絵本をはじめとする海外の英語教材は、日本の書籍と販売ルートが異なるため、教員が教材を実際に見たり聞いたりして選ぶ機会が限られているからである。子どもの実態に合った教材選択と、適正な予算執行のために、教員が、教材を直接手にとって吟味できる機会を設けることが重要であると考えた。

続いて、第二回情報交流会を行う。この会は、主にパイロット校の取組の中間報告会としての意味付けをもつ。交流会で行う内容を枠内に示す。

- ・事業の目的・趣旨の確認
- ・パイロット校事前調査分析
- ・パイロット校の取組の紹介
- ・教材などの情報提供
- ・研究協力校の先進的な取組の紹介
- ・パイロット校による実践発表およびグループ協議

グループ協議では、事前提出資料をもとに、自校の取組についての実践報告をし、実践校はそれを参考としながら自校の取組を進めるようにする。

パイロット校は、各校からのフィードバックを受けることで、取組を振り返り、必要であれば軌道修正をし、取組の推進を図ることができるようにする。

ii 情報発信の仕組みをつくる

研究課は、学校が取組を進めていくために必要な情報を発信する。その手段として、以下の仕組みづくりを行う。

- ・総合教材ポータルサイトの活用
- ・English Shower Cornerの設置
- ・English Shower Timesの発行

iii 事業の評価とその検証を行う

事業の実施に当たり、評価の内容と方法を事前に周知する。各校の振り返りの手だてとして、事前、中間期、事後に、質問紙調査を行う。そのデータを共有することにより、学校は、自校の取組を点検し、更によりよいものに改善していく視点をもつことが求められる。

第3節 研究課から発信するプロジェクト・プラン

（１）プロジェクト・プランの留意点

本事業を学校で取り組む際に、実践内容は枠内の条件を満たしたものでなければならない。

- ・取組はインプット理論に基づいているか。
- ・取組は学校の子どもの実態に合っているか。
- ・取組は自校の学校教育目標とつながっているか。

これら三点を踏まえた上で、学校は自校に合った取組を考え、到達目標を決めて実践する。

（２）プロジェクト・プランの内容

研究課からプロジェクト・プランを発信し、学校の取組を支援する。枠内に六つの柱を示す。

- i 絵本を活用したモジュール指導案や研修資料の提示（小学校）
- ii 多読の取組の提示（おもに中学校・一部の小学校）
- iii 英字新聞・音楽を活用したリスニング教材の提示（中学校）
- iv 教員の英語力向上のための取組の提示（小学校）
- v 校内環境の整備（小学校・中学校）
- vi ALTと連携した取組の提示（小学校・中学校）

i 絵本を活用したモジュール指導案や研修資料の提示（小学校）

学級担任やALTが絵本の読み聞かせを行うことで、英語のリズムや韻に慣れ親しみ、異文化への関心を高め、更に興味をもって読み聞かせを聞こうとする子どもを育てることができると考える。そのため、絵本の読み聞かせをする際に、活用可能な教材や資料を作成する必要がある。読み聞かせに必要と思われる教材・資料を枠内に示す。

- ・研修資料「絵本の読み聞かせをはじめよう」
- ・絵本教材リスト
- ・絵本読み聞かせ・モジュール指導案

ii 多読の取組の提示（おもに中学校・一部の小学校）

朝読書などの課外の時間に、Graded ReaderやLeveled Readerなどの教材を使った多読の活動を通して、主に読む力の向上を目指す。自分に合ったレベルの本から無理なく始め、継続的に読む習慣を付け、英語インプット量を増やすためには、計画的・継続的に学校体制で取り組むことと、取組に関わる全教員の共通理解が欠かせない。取組を支える資料と仕組みを枠内に示した。

- ・多読 Q & A
- ・記録用ワークシート
- ・レベル・総語数表示
- ・京都市立図書館との連携

iii 英字新聞・音楽を活用したリスニング教材の提示（中学校）

音声インプットの効果を最大限に生かすためには、英語の歌やリスニング教材をただ聞き流すだけでなく、注意して何度も聞かせる活動を取り入れるなど、聞かせ方を工夫する必要がある。そこで、計画的・継続的な活動例を示し、聞く力の向上を目指す。

先述の中学校実態調査によれば、第1学年の英

語科授業では、英字新聞や書籍などの活用がなされている学校は7%、映画やビデオなどの視聴覚教材の活用がなされている学校が33%であった(42)。この結果から今後、英字新聞とリスニングを組み合わせた取組は、新たな工夫の余地があると考えられる。音源のダウンロードが可能な英字新聞は多い。そこで、英字新聞や英語の歌を活用したリスニングの指導例を示す。

iv 教員の英語力向上のための取組の提示（小学校）

多忙な小学校教員が、授業をする際に必要な教室英語を効率的に身に付けられるように、教員の英語力向上のための取組を示す。

現在、外国語活動の指導を行っているのは、高学年担任が中心であるが、2020年には小学校3年生以上で外国語活動が、高学年は教科としての英語が開始される。このことから、全教員が事業に取り組む中で、教室英語力の向上を目指す必要があると考える。枠内に詳細を示す。

- ・音声学の基礎を取り入れた、基本的な発音の仕方について学ぶ。
- ・ALTと連携し、教員がファシリテーターを務める。
- ・校内で継続的に5分～10分程度の研修を実施する。
- ・自主研修をうながす。

v 校内環境の整備（小学校・中学校）

子どもが興味をもつ内容を、文字や絵、写真とともに掲示し、子どもの目に触れる校内環境を整える。授業内容と連動させ、子どもに慣れ親しませたい表現を扱うことも考えられる。特に、中学校では、耳で聞いた内容を文字でも確かめられるようにし、四技能の統合を意識して取り組むことができるようにする。

vi ALTと連携した取組の提示（小学校・中学校）

子どもがネイティブの英語や異文化に触れることができるように、市内小・中学校にALTが派遣されており、一学級あたり年間平均約16時間の配当がある。しかし、子どもが常時、ネイティブの英語に触れることができるわけではない。

そこで市のALTと連携し、ネイティブの音声にたつぷりと触れることのできる教材を作成し、自然な文脈で英語のインプットができるようにする。小・中学生がネイティブの英語に触れる機会とすることはもちろん、英語でアウトプットする際の手本としても活用できるようにする。詳細を次ページ左上枠内に示す。

- ・京都の伝統文化を紹介する英語ムービー
- ・映像資料の SCRIPT（台本）と小・中学校の授業における活用例
- ・ネイティブの音声による給食献立紹介と読み原稿 SCRIPT（台本）

以上のように、i から vi までに主な取組の詳細を示した。学校はこれらの教材や計画を参考にして各校で実施する。

次章では、事業の運営体制とプロジェクト・プランをはじめとする取組の実際について、各校の実践例を示しながら論じる。

- (38) 西垣知佳子, 中山博「実践的英語コミュニケーション能力の養成のための理論と実践」『教科教育学研究 第22集』日本教育大学協会第二常置委員会 2004 pp. 17~18
- (39) Hord, S. (2009) Professional Learning Communities: Educators work together toward a shared purpose *Journal of Staff Development*, 30 (1) pp. 40~43
- (40) Hord, S. & Sommers, W. (2008) Leading Professional Learning Communities. Voices from Research and Practice Corwin Press p. 9
- (41) ピーター・M・センゲ「学習する学校-子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する」英治出版 2014 pp. 867~869
- (42) 前掲(11)

第3章 “KYOTO English Shower Project” 事業の実際

第1節 事業運営の実際

(1) 運営体制の実際

事業を運営する上で、組織間の連携は欠かせない。組織間連携の構造を図3-1に、事業の年間事業計画を表3-1に示した。

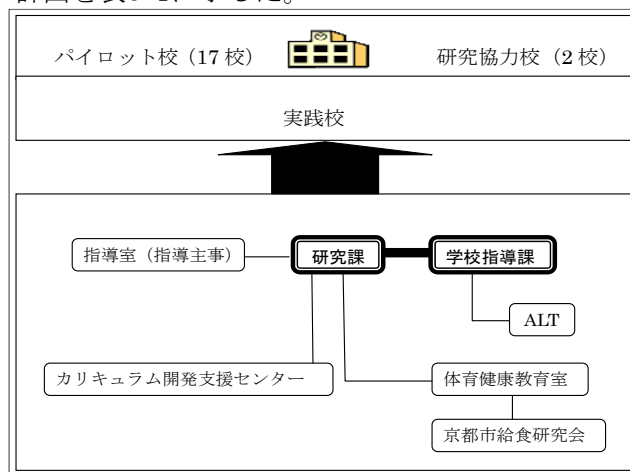


図3-1 組織間連携の構造

表3-1 年間事業計画

月	内容	運営	学校の動き
4月	事業計画立案	事業の周知	
5月	教材・指導案作成	事業募集・募集受付	パイロット校・実践校応募
6月	交流会準備・運営 事前調査分析	第一回情報交流会実施 事前調査依頼	計画書・予算書提出 交流会参加 事前調査提出
7月	コーナーの設置		
通年	取組の取材・新聞発行 総合教材ポータルサイト からの情報発信 教材・指導案作成 テーマ展示 研究協力校での研究	各校の進捗状況把握 広報	取材・参観への対応
10月	交流会準備・運営	第二回情報交流会実施	交流会参加・事前資料提出 グループ発表
12月	中間調査分析	中間調査依頼	中間調査提出
2月	事後調査分析	事後調査依頼	報告書提出
3月	プロジェクト・プランの まとめ	次年度計画立案	

運営のための組織は、計画段階で想定していたよりも広がりのあるものとなった。図3-1にあるように、研究課・学校指導課が組織の中心となり、各課・研究会の協力を得て取組を進めている。学校に対して、研究協力校・パイロット校・実践校とそれぞれの役割を示すとともに、学校の協働を支えるために、事業の目的や、役割を明確に示し、協力を要請した。本節では、表3-1に示した事業の年間計画をもとに、情報発信・交流・評価についての取組を提示する。

(2) 情報発信の手だてと実際

研究課から情報発信する手だてとして、①総合教材ポータルサイトの活用、②コーナーの設置、③通信の発行の三点を実施した。学校は、これらの特徴を踏まえて活用し、取組を実施することが求められる。

①総合教材ポータルサイトの活用

京都市の総合教材ポータルサイトは、市立学校の教員が、学校のパソコンから学習指導案や教材をダウンロードしたり、動画を見て自主研修をしたりできる利便性のあるコンテンツである。

学校の取組を継続的に支援するため、研究課で作成した教材や映像は、随時このサイトから発信した。データは、各校の実態に合わせて、改訂や変更が可能である。また、必要なデータを検索しやすくするため、全ての教材データの上段に「英語シャワー・英語の歌」などのように、領域を示し、統一した。

②イングリッシュ・シャワー・コーナーの設置

カリキュラム開発支援センターの教材開発室Ⅱ

では、図3-2にあるように、7月よりイングリッシュ・シャワー・コーナーを設け、事業の広報と内容周知を行っている。



図3-2 テーマ展示の様子

多くの教材にじかに触れることができる点が、このコーナーの利点である。コーナーではこれまでに、「絵本の読み聞かせ」「英語の歌の年間指導計画」など、テーマを決めて期間中、指導法や教材を紹介している。「歌の年間指導例」「英字新聞を活用したリスニング教材」「多読の指導例」「絵本の読み聞かせの指導例」などについて、指導法や留意点、指導案やワークシートなどの補助教材を展示した。

また、多読をテーマに市立図書館と連携し、200冊を超える書籍を約1カ月間展示し、来館者が多くの教材を手にとって取組の参考にできるようにした。また、多読に使う絵本や教材には、総語数と難易度を表示した。

絵本の読み聞かせの展示では、同じ絵本を日本語と英語で読み比べる提案や、発達段階やニーズに合った絵本選びの提案を行った。日本語と英語の絵本を並べて示し、既に日本語で内容を知っている子どもに英語で読み聞かせをすることで、英語へのハードルが下がり、理解が深まることを展示内容に盛り込んだ。また、所蔵する絵本の難易度やあらすじを示し、絵本選びに役立てられるようにした。約400冊ある絵本には、難易度シールを表示した。

③ “English Shower Times” の発行

パイロット校や実践校などの、先進的・特徴的な取組の情報を“English Shower Times”という通信に掲載し、発行している。交流会で情報を発信したり、共有したりするのには、時間的な制約がある。しかし、京都市のイントラネットによる通信の発行は、常時交流ができる利点がある。取材を通して、各校の取組の様子や事業を通して学校が育てたい子ども像や教職員の願い、同僚性に関する記事を掲載し、月2回程度発行している。図3-3は通信の一例である。また、これまでに取り上げた主なテーマは右枠内の通りである。



図3-3 “English Shower Times”

【内容】

- ・委員会活動の子どもによる給食献立紹介
- ・絵本読み聞かせタイム
- ・全校リスニングタイム
- ・多読の取組
- ・全校朝会での学年発表・ゲーム大会

【組織】

- ・管理職のリーダーシップ
- ・校内研修と取組の連携
- ・英語部会と委員会活動の連携
- ・ALTとの連携
- ・計画的・継続的に取り組む学校体制
- ・同僚性を生かした取組

【環境】

- ・校内掲示の工夫
- ・他教科・領域と連携させた取組
- ・言葉との出会いの工夫

（3）発信・交流の手だてと実際

①第一回情報交流会（パイロット校対象）

パイロット校の管理職と担当教員が悉皆で参加し、会で得た情報を参考に、自校の学校体制の

確立と年間計画の作成に生かすことが交流会のねらいである。そこで、本事業が、インプット理論に裏付けられた内容であることを示した上で、事業の目的と趣旨を説明した。特に重点を置いて周知した内容のうち、四点を枠内に示す。

- ・継続的に続ける。
- ・負担の少ない方法を考える。
- ・英語科教員、外国語活動主任だけの取組とせず、全教職員で目的を共有して協力して取り組む。
- ・総合教材ポータルサイトで情報を共有する。

会では、事例についてのワークショップを行い、指導案や教材などの資料を配布した。この資料が、総合教材ポータルサイトからダウンロードして活用できることを示した。

図3-4は、業者と連携して教材紹介ブースを設置した様子である。六社から協力を得て、交流会の前後に展示を行った。洋書絵本や音声教材、指導用教材、英字新聞や電子辞書などの展示を見ながら、参加者が実際に、教材を手にとって音声を聞いたり、内容について質問し、メモを取ったりするなどの姿



図3-4 ブースによる教材紹介が見られた。第一回情報交流会の事後アンケートの結果を表3-2に示す。

表3-2 第一回情報交流会アンケート (n=25) (%)

質問内容	とても そう思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
会のねらいは明確にわかった	80.0	20.0	0.0	0.0
説明内容は理解できた	72.0	28.0	0.0	0.0
説明内容に満足できた	68.0	32.0	0.0	0.0
内容は今後に役立てていけそう	72.0	28.0	0.0	0.0
書籍・教材の展示は役に立った	40.0	60.0	0.0	0.0

表3-2から、ねらいの周知や情報提供への満足度が「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて100.0%であったことから、各校が、本格的に事業計画をたてる時期に合わせた発信ができたのではないかと考える。「展示が役に立った」との回答は100.0%であったが、「とてもそう思う」は40.0%、

「ややそう思う」が60.0%で、他の項目に比べ、「とてもそう思う」の割合は少なかったことから、教材紹介は、引き続き、コーナーの展示をして継続的に周知を図るとともに、第二回情報交流会では、各校で教材について交流できるように、当初の計画を修正した。事後に教材などの購入計画の変更の問い合わせが相次いだことや、のちの聞き取りから、教材紹介をきっかけに教材を購入したとの

声が寄せられたことから、教材紹介の試みは、各校の教材選びに役立つ企画であったといえる。

事後調査からまとめると、学校が、校内で事業を進めていくために、交流会の実施は有効であったといえる。

②第二回情報交流会（パイロット校・実践校対象）

第二回交流会は、パイロット校の取組の中間報告を実践校に向けて発信する会として位置付けた。前半の全体会では、取組紹介や事前調査の分析などの情報提供を行った。後半の分科会は、パイロット校と実践校から成る小グループで、取組についての交流を行った。

パイロット校は、これまでの実践をまとめた資料を事前に提出し、あらかじめ、グループ内での発表に向けて準備をして会に臨んだ。図3-5は、第二回情報交流会の様子である。



図3-5 第二回情報交流会の様子 全体会(左)・分科会(右)

図3-5にあるように、パイロット校の教員が、写真や具体物を使って自校の取組を紹介し、それに対して実践校教員が質問をしたり感想を述べたりする姿が見られた。表3-3は事後アンケート結果である。

表3-3 第二回情報交流会アンケート (n=124) (%)

質問内容	とても そう思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
会のねらいは明確にわかった	60.5	37.9	1.6	0.0
説明内容は理解できた	57.3	41.1	1.6	0.0
説明内容に満足できた	46.0	47.5	6.5	0.0
内容は今後に役立てていけそう	60.5	36.3	2.4	0.8
会の運営方法、手法に満足できた	41.5	43.0	12.2	3.3

表3-3のとおり、「会の運営方法、手法に満足できた」を除いた項目で、「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて90.0%を超える結果となった。枠内は記述回答の一部である。

- ・パイロット校の取組やポータルサイトの教材紹介は取組の参考になった。[多数]
- ・(パイロット校の発表を聞いた)全ての先生が様々な意見を述べてくれて意義深かった。
- ・他校と交流できて本当に助かった。
- ・参考になる教材が多く、とてもよかった。

以上の回答から、第二回交流会は、取り組み始めて間もない実践校が情報収集をするという役割

を十分果たしていたといえる。また、パイロット校は情報を提供することで、他校からのフィードバックを受けることができたといえる。このように、情報交流会は、実践校・パイロット校双方にとって有意義な取組であったと考えられる。

一方、会の運営方法・手法について満足できなかったについて、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」という回答が15.5%あった。関連する記述回答を枠内に示す。

- ・交流の時間がもっとほしかった。[多数]
- ・皆で共有したいこと、相談したいこと、教えてほしいことがたくさんある。
- ・パイロット校などからの生の声を聞ける機会がもっとあればよい。
- ・このような交流の場をまた設定してほしい。
- ・交流時間がもう少しあれば、それぞれの取組だけでなく、疑問や悩みも話し合えたと思う。

これらの結果をまとめると、分科会の交流時間が15分間と短かったため、グループによっては話し合いを深めるまでに至らなかった可能性も考えられる。したがって、会の全体会と分科会の時間配分には改善の余地があったと考えられる。

枠内は今後の取組への意欲に関する記述回答である。

- ・本日の会の内容を本校でも活用していきたい。[多数]
- ・取組を強化していきたい。
- ・パイロット校の実践から、自校でも取り組みそうなものを取り入れたい。
- ・京都市全体の取組を知り、本校の取組を再度見直していきたいと思う。
- ・難しいと思っていたが、今日の会を経て、本校でも何かできそうだと、やってみたいと思った。

これらの調査結果から、参加者それぞれが自校の取組と明確な課題意識をもって会に参加していることや、取組への意欲を知ることができた。

今回、小・中・総合支援学校合わせて、136校150名が交流会に参加したことから、全市的に事業への関心が高まっている傾向がうかがえる。

したがって、情報発信と交流を目的とした二度の交流会の実施は、学校が事業を進めていくために、有効であったといえる。

（４）評価・検証の手だてと実際

事業の成果と課題を検証するために、パイロット校の管理職を対象に、三回の調査（6月末：事前調査、12月中旬：中間調査、年度末：事後調査）を実施した。右上枠内は、パイロット校で実施し

た調査項目である。

【小学校・管理職用事前アンケート調査項目】

- (1) 学校の子どもの様子
- (2) 取り入れたい取組や体制、指導者について

【中学校・管理職用事前アンケート調査項目】

- (1) 生徒の英語に対する関心・意欲について
- (2) 校内体制について
- (3) 取り入れたい取組について

図3-6は、事前意識調査の一部である。

【問2】校内の取組や体制、指導者についてあてはまるものを1～4のうち、1つ選んで○をつけて下さい。

4＝よくあてはまる 3＝あてはまる 2＝あまりあてはまらない 1＝全くあてはまらない

(1) 指導者について	
英語が好きで、抵抗感がない（恥ずかしがらない）	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
ALTと積極的にコミュニケーションを図ろうとしている	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
外国語活動（何らかの英語の取組）を指導する自信がある	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
教室英語に自信がある	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
日常的に（挨拶などで）英語を使っている	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
(2) 校内体制について	
教職員の協力を得て共通理解のもと取り組みたい	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
時間を決めて継続した取組を行いたい	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
参観・行事等で取組の周知を図りたい	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
(3) 取り入れたい取組について	
積極的にコミュニケーションの楽しさを体験させる取組	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
日常的に英語に触れる校内環境をつくる取組	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
ALTなどネイティブ・スピーカーの英語をたくさん聞かせる取組	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

図3-6 事前意識調査の一部

調査は四件法と自由記述からなり、質問の項目は、三つの調査でほぼ統一を図った。そうすることで、時間の経過とともに、子どもや教員の変容を把握しやすくなると考えた。また、事前調査の結果は、第二回情報交流会で報告するとともに、実践校に対して、調査用紙データの共有化を図った。実践校は、校内で取組を検証するために活用する。なお、中間調査の結果は、研究発表会（2月）で報告した。年度末に行う事後調査の結果は、“English Shower Times”上に掲載して報告した。学校は、調査結果を踏まえて校内の取組を検証し、次年度に向けて改善を図る。

第2節 取組の実際

（１）プロジェクト・プランの実際

研究課から発信するプロジェクト・プランは、インプット理論をはじめとした理論的な裏付けを行っている。取組のうち、校内の環境整備を除く五つについて、以下に説明する。

- ①絵本を活用した研修資料やモジュール指導案の提示
- ②多読の取組の提示
- ③英語の歌・英字新聞を活用したリスニング教材の提示
- ④教員の英語力向上のための取組の提示
- ⑤ALTと連携した取組の提示

①絵本を活用した研修資料やモジュール指導案の提示（小学校）

【研修資料・研修映像「絵本の読み聞かせをはじめよう」(11分)】

授業や授業以外で、学級担任が日常的に絵本の読み聞かせに取り組めるように、校内研修などで活用するための資料・映像を作成し、配信した。絵本の効用、選び方のポイント、読み聞かせの留意点、文字の扱いなどについて示すとともに、読み聞かせの例、導入の活動例を映像で示した。これは、初めて英語絵本を読む教員が、読み聞かせのイメージをもてるようにするためである。

【絵本教材リスト】

カリキュラム開発支援センターで貸出可能な絵本教材について、指導者が絵本選びをしやすいように、絵本の内容や難易度のリストを示した。

図3-7は、その一部である。

初級	100L	I Want to Be an Astronaut	Byron Barton	将来になりたい職業、夢を扱う。6年生に最適。	
	130L	Bark, George	Julius Fieffer	Georgeは犬なのに、鳴き声が、心配したお母さんは？	
	130L	Sheep in a Jeep	SHAW NANCY E.	5匹の羊がジープでドライブに。リズムミカルな面白さ	
	140L	The Very Busy Spiders	Eric Carle	美しい葉を作るのに大忙しのSpider	
	140L	FIVE LITTLE MONKEYS JUMPING ON BED (大型絵本)	CHRISTELOW EILEEN	5匹の子猫がおやすみの後に繰り広げる大騒動。	
中級	160L	The Happy Day	KRAUSS RUTH	日本版版「はなをくぐく」動物たちがあつめた本は？	
	180L	One fish, two fish, red fish, blue fish	Dr. Seuss	単語同音魚、リズムカルな表現がたくさぬ	
	ポール・ワイルドに読み聞かせ後者は	200L	Timon&Pumbaa	George Shannon	アルファベット文字のつく言葉をさがす。
		200L	Dr. Seuss's ABC	Dr. Seuss	Aのつくことばをリズムカルにまとめている。
		200L	The Foot Book	Dr. Seuss	foot と feet の違い、リズム
		200L	I'm Hungry!	Roal Campbell	しかけ絵本 日常使う言葉が何回も出てくる。
		200L	It's Mine!	Roal Campbell	しかけ絵本 日常使う言葉が何回も出てくる。
	AD-大人による読み聞かせ向き	200L	What's the time, Mr. Wolf?	ILL. KUBLER ANNIE	時間を導かれて答える楽しい英語学習。
		200L	Lunch with Cat and Dog	R. L. Williams	Cat と Dog、食べ物の量を考える。どちらがお得？
		200L	Today is Monday	Eric Carle	曜日には何を食べる、の繰り返し面白い。
210L		Tag the Dog	Hawkins Collin	猫、リズムの面白さが特徴的。	
210L		Little blue and little yellow	Leo Lionni	あお君とこいちゃん、仲良しでどうとう「みどり」に。	
AD-大人による読み聞かせ向き	AD230L	Pat the Cat	Hawkins Collin	猫の面白さ	

図3-7 難易度別教材リスト

初級・中級・上級の三段階で難易度を示すとともに、文中に出てくる主な言語材料や物語のあらすじ、主題を示した。また、ALTの読み聞かせに適している本には、ALTと記した。

既知の物語であっても、英語レベルが高く、指導者が読みにくい絵本である場合も少なくない。そこで、指導者はあらかじめ、言語材料や難易度を検討しておく必要がある。これは指導者が、子どもの前で自信をもって読み聞かせをするための支援として位置付けている。

【絵本読み聞かせ・モジュール指導案】

一冊の本をどう読み進めたらよいかという指導者の不安に対応できるように、絵本活用の指導案を示した。1回10分×4回～5回を目安としたモジュールの枠組は、全学年を対象とし、子どもへの声かけ例、内容に合わせた導入の活動や、読み聞かせ後の活動を示した。また、指導上の留意点や外国語活動の言語材料との関連を示し、発達段階

に応じた活用ができるようにした。また、授業での活用が可能となるように、目標、評価計画を併せて示している。例を図3-8に示す。

絵本の読み聞かせしよう

“Tomorrow’s Alphabet” by G.Shannon

B is for eggs, tomorrow’s Bird. 「Bは卵、卵はみらいの鳥」同じパターン、リズムの繰り返しでA-Zまで続きます。クイズ感覚でアルファベットに慣れ親しむことができます。

対象

- 高学年 5年 Lesson 6 「アルファベットをさがそう」と関連あり。
- 低学年・中学年

目標と評価

低・中学年では、児童の発達段階に配慮し、文字を読むことを求めるのではなく、絵に対応した文字があることに気付かせる程度にとどめ、英語の音やリズムに触れ、お話の内容を楽しむようにする。

目標	・絵本の読み聞かせを通して、アルファベット大文字には、名前と音の読み方があることに気付く。
目標	・積極的にアルファベット大文字を読んだり聞いたりしようとする。
評価の観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度 外国語への慣れ親しみ 言語や文化に関する気付き
評価	・絵本のアルファベット文字に興味をもち、積極的に読んだり聞いたりしている。 ・アルファベット大文字とその読み方を一致させている。 ・アルファベット大文字の名前と音の読み方があることに気付いている。

主な表現

- アルファベット大文字 A-Z
- アルファベットで始まる単語 apple, bird, cheese, dog, ember, flour, garden, hat, ice cube, jack-o’ lantern, ketchup, leaf, moth, nest, oak tree, pot, quilt, raisin, soup, toast, us, valentine, wall, X-ray, yarn, zero

準備物

- 絵本 “Tomorrow’s Alphabet (CDあり)
- たね

図3-8 モジュール指導案

②多読の取組の提示（おもに中学校・一部小学校）

【多読Q&A】

多読の目的や予想される効果、指導上の留意点や指導者の役割、評価や発展的な活動について、Q&A方式で端的にまとめ、初めて取り組む学校の参考となるようにした。

【多読用ワークシート】

多読の開始レベルを測る目安として、事前チェックテストを作成した。また、子どもが多読の活動を記録するワークシートを図3-9に示した。

英語シャワー・多読 Q&A

KYOTO English Shower Project 2014 研究員 矢野

多読用記録シート②

★Extensive Readingをはじめよう★

めざせ！ 10,000 words!

No.1	Grade	Class	Number	Name	Title& Summary	語数	合計
Start→Finish	○○→○○						
11/6→11/8	(YL)			Peter pan		1345	1345
／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／

・（上段）読みやすさレベルと本のタイトルを記録します。

・（下段）内容を一文（日本語）で書きます。内容理解の評価につなげることができます。

図3-9 多読用ワークシート例

読んだ語数をシートに記録するとともに、要点を一文でまとめることで、子どもがどれだけの量を読み、内容を理解しているかを評価することができる。

【多読教材のレベル・総語数表示】

YL0.4 214 語 絵本表紙に「読みやすさレベル 0.4で総語数214語」のように、シールで示し、背表紙に難易度別色シールを表示している。	<table> <tr> <th>段階 (0.5ごと)</th><th>シールの色</th></tr> <tr> <td>0-0.4</td><td>白</td></tr> <tr> <td>0.5-0.9</td><td>桃</td></tr> <tr> <td>1.0-1.4</td><td>オレンジ</td></tr> <tr> <td>1.5-1.9</td><td>緑</td></tr> <tr> <td>2.0-2.4</td><td>空</td></tr> <tr> <td>2.5-2.9</td><td>紫</td></tr> </table>	段階 (0.5ごと)	シールの色	0-0.4	白	0.5-0.9	桃	1.0-1.4	オレンジ	1.5-1.9	緑	2.0-2.4	空	2.5-2.9	紫
段階 (0.5ごと)	シールの色														
0-0.4	白														
0.5-0.9	桃														
1.0-1.4	オレンジ														
1.5-1.9	緑														
2.0-2.4	空														
2.5-2.9	紫														

図3-10 教材のレベル・語数表示

図3-10にあるように、多読用教材や絵本を、読みやすさレベル(YL)に従い、レベルと総語数を、シールで表示した。文字のない本をYL0とし、例えば、中学1年生の前期であれば、YL0.1程度から始めると無理がないと考える。書籍は難易度別に書棚に配置している。

【京都市立図書館との連携】

学校が多くの多読教材を確保するための方法として、市立図書館の学校団体貸出制度を利用する方法を示し、学校の金銭的負担を軽減できるようにする。市立図書館の支援を受け、総合教育センター館内に期間を決めて展示コーナーを設置し、多読の方法や教材についての紹介を行った。

③英語の歌・英字新聞を活用したリスニング教材の提示（中学校）

【英語の歌：年間指導計画】

歌詞に出てくる主な言語材料を、学習内容と指導時期、指導学年と関連させて、月別・学年別の指導計画を図3-11に示した。

【中2 今月の歌】年間計画（例）		
月	曲名	主な言語材料
4月	未来へ（キロー English version）	Be 動詞過去形、一般動詞過去形 未来形 I'll be a mother, too.
	Yellow Submarine（ビートルズ）	過去形
5月	The End of the World（スターキー・デイヴィス）	Why? Because～.
	Close to You（カーペンターズ）	Why? Because～.
6月	Hey Jude（ビートルズ）	不定詞 Don't make it bad.
7月	I Just Called to Say I Love You（スティービー・ナッター）	to不定詞の形容詞的用法、副詞的用法
9月	Bridge Over Troubled Water（サイモン＆ガーファック）	未来時制 will 接続詞 when, like～
	I'll Remember（マドンナ）	will（意志を表す）現在進行形 接触節 if節、when節、受け身 to不定詞
10月	Honesty（ビリー・ジョエル）	過去形 wrap it up I'll～.
11月	Pure Imagination（映画「チャーリーとチョコレート工場」）	There is～. You'll be free
12月	Last Christmas（ワム!）	後置修飾、as long as、命令文、Unit 7の My Favorite Movie と関連
1月	Climb Every Mountain（サウンド・オブ・ミュージック）	I'm like～. I'll～. Let me share 押韻
2月	A Whole New World（ディズニー映画 アラジン）	自分らしさ、希望 現在進行形、接続詞、比較 as high as
3月	If We Hold on Together（ダイアナ・ロス）	

図3-11 英語の歌年間指導計画例

【英語の歌指導例】

英語の歌を聞かせる際の留意点について、指導例を右上枠内に示した。

- ①歌詞カードを見ずに聞き、どのような曲か話し合う。
- ②聞こえた表現を出し合い、歌詞カードで確認する。
- ③対になっている語があれば知らせ、○で囲みながら聞く。
- ④歌詞カード（右半分）を見て歌う。
- ⑤ディクテーションをする。

初めて曲を聞かせる際には、指導者が子どもに聞く視点を与え、内容の意味を理解させる。その後、学校生活の中で、曲を何度も流して聞かせ、効果的なインプットができるようにする。

【英字新聞の活用】

中学レベル程度の語彙・表現を使った英字新聞と、それに対応する音源を活用したリスニング教材を総合教材ポータルサイト上に例示した。新聞教材は子どもの興味を引く、タイムリーな話題から英語に触れる絶好の機会であると考え。しかし、英字新聞をそのまま中学生に使うことは難しいため、子どもが理解可能な表現を使って書き換えた教材を校内で準備する必要がある。その参考となるように、教材や指導例の紹介を行った。

④教員の英語力向上のための取組の提示（小学校）

イングリッシュ・シャワー事業の対象は、子どもだけではない。小学校で、子どもに関わる教員が、英語への苦手意識を克服し、自信をもって教室英語が使えるようになることを目指した研修の在り方を提案した。目指すのは、ネイティブ・スピーカーのような英語ではなく、国際共通語としての通じる英語である。研修の進行は、校内のファシリテーター役が務める。朝の打合せ後の5分間、会議終了後の10分間を使った全20回分の計画を図3-12に、その資料の一部を図3-13に示した。

第2回：英語と日本語の違い① 音節

●こんな疑問はありますか？

「洋楽のラップ、速すぎてついていけない・・・」

日本語の音感 VS 英語の音感

日本語	英語
ひびく文字→母音	母音の文字→母音
テンシ ●●●●	strange ●●●●●
しずけさで　かひつとひこ　みずのと	strange
ア・レ・イ・ス・ノ・ク・ラ・ム	There is a drop of golden sun
静かなリズム (Subtle-rhythmic rhythm)	強弱リズム (Stress-rhythmic rhythm)
メロディが主、聴感	強弱、音の長短

演習：英語でグロコ！

クッキングをして、グロスアップ、バーベキュー、ダンス

図3-12 教室英語研修計画

図3-13 研修用資料

さらに、ALTの協力を得て、この研修に継続的に取り組むことで、教員の教室英語力の向上が期待できると考える。

⑤ALTと連携した取組の提示（小学校・中学校）

取組の中で、できるだけネイティブ・スピーカーの英語をたくさん聞かせるためには、各校に勤務するALTに協力を得る必要がある。ここでは、ALTの協力のもと、全市規模で展開した二つの事業について示す。

【英語版給食カレンダー】

毎月の給食から、特徴的な献立（例：外国や日本の料理や、月の給食目標に関連したメニュー）を5日分選び、ALTによる英語版献立紹介を毎月配信している。図3-14は献立紹介例である。

献立日程	献立	説明原稿
1ブロック (11/26) 2ブロック (11/5) 3ブロック (11/11) 4ブロック (11/28)	肉団子スープ煮 じゃがいもピリカラ いため かき 黒糖コッペパン 牛乳 ★献立の後にパワーポイントデータあり。	Hello, everyone. Today is 曜日, November 日付. This is ○○○○speaking. Today's lunch menu is <u>meatball soup, sautéed spicy potatoes, persimmon, brown sugar bread, and milk.</u> ●Now, it's quiz time. How do persimmons taste? Sweet or tart? (3秒) Both are correct. Dried <i>shibugaki</i> (tart persimmon) become sweet. <i>Fuyugaki</i> are very famous in Kyoto, Oe. They are big and sweet. Enjoy your lunch. Thank you.

図3-14 英語による給食献立紹介の例

各校の教室では、教室の大型テレビに給食カレンダーを写して音声聞ける仕組みになっている。全学年が対象となるため、献立の他、給食に関連したクイズなどの画像や日本語の説明を入れている。例えば、子どもが英語を聞いて全てを理解できなくても、画像による視覚的な支援をすることで、内容を把握しやすいように配慮している。作成に当たり、毎月、ALTの協力を得て、原稿チェックや音声録音を行っている。例えば、英語圏では魚を食べない国・地域もあり、適切な単語がない場合もあるなど、日本の食習慣や食文化、調理法を全て英語で表現することは不可能である。この取組を通して、子どもが日常的に触れる給食に関わる英語から、言語への気付きや異文化への興味につなげることが可能である。

【ALTムービー】

ALTが出演して、京都の伝統文化を紹介する英語ムービーを作成した。授業の導入や対話練習の教材として、文化を発信する際の手本として、活用することも視野に入れている。主に中学生レベルの英語表現を使用しているが、小学生にも理解できるように、一部、日本語で話す場面やテロップ（日本語・英語）を入れた。図3-15は映像の一部、図3-16はスクリプト（台本）の一部である。



図3-15 ALTムービーの映像（左：日本料理・右：茶道）

シーン	日本語	英語
電話で約束する。	N: リアンカ、こんにちは。こちらニックです。元気？ L: あら、こんにちは。ニック。わたしは元気よ。 N: ところでさ、ばくと昼食を食べないかい？ L: あら、素敵ね。ご一緒しましょう。 N: 何が食べたいですか？ L: 和食が食べたいなあ。 N: いいね。ところでさ、和食はユネスコ世界遺産に登録されたよね。知ってる？ L: もちろん知ってるわ。行ってみましょうよ。 N: 喜んで。	N: Hello, Lianca. This is Nick. How are you? L: Hi, Nick. I'm fine. How are you? N: I'm great! By the way, how about going for lunch with me? L: Wow, that would be nice. Let's go. N: What do you want to eat? L: Well... How about <i>washoku</i>? N: <i>Washoku</i>? Sounds nice. Did you know that <i>washoku</i> was registered by UNESCO? L: Of course I know. Let's go! N: Yes, let's.
店に入る。	N: さて、ぼくたちは和食レストランに来ました。 L: どんなメニューがあるか、わくわくするわ。	N: Now, here we are at the Japanese restaurant. L: I'm very excited to see you what's on the menu.
部屋に通され、メニューを選ぶ。	L: おなかすいたわ。 N: ばくも。 L: ねえ、何を食べる？（メニューを見て） N: ええっと、懐石料理にしようかな。（とメニューを指す） L: 懐石料理？ それって何？ N: それは和食のコースってところかな。 L: へえ、そうなんだ。わたし初めて。 S: 失礼します。お決まりでございますか？ N: 懐石料理を。 L: わたしも同じものを。 S: かしこまりました。少々お待ちくださいませ。	L: I'm hungry. N: Me, too. L: Well, what do you want to have? (Look at the menu) N: Uh, I'd like <i>kaiseki ryori</i>. (とメニューを指す) L: <i>Kaiseki</i>? What is it like? N: It's like a kind of Japanese course. L: Uh-huh. I see. This is my first time to try it. S: What would you like? N: I'd like <i>kaiseki ryori</i>. L: I'd like the same one, please. S: Certainly, madam. Just a moment, please.

図3-16 “Let’s Go to a Japanese Restaurant” のスクリプト

この映像を発展的に、日々の授業で活用することも考えられる。そこで、小学5年生から中学3年生までの領域・教科の中で、関連して指導が可能な単元の指導計画例を示し、総合教材ポータルサイトから発信している。

（２）パイロット校・実践校における組織の実際

パイロット校や実践校の取組を支える組織づくりのための四つの視点を枠内に示し、特徴的な取組の実際を紹介する。

- ①校内体制の確立
- ②委員会活動・生徒会活動との連携
- ③ALTとの連携
- ④同僚性の構築

①校内体制の確立

校内で事業を始める際に、そのねらいや趣旨を教職員間で共通理解することが大切である。教員が一人で担当するのではなく、中心となる教員とそれを支える組織を立ち上げることが必要である。

また、子どもに対しても、イングリッシュ・シャワー事業で何に取り組み、何を目指すのか、その意義を理解させてから始めることが大切であると考え。

各校では、校務分掌上に、取組の中心となる組織を位置付けている。パイロット校に見られる特徴的な組織としては、各学年1名で構成される「英語部」、管理職、主任を中心とした「English Shower Project実施委員会」、主任を中心に若手・中堅道

場の取組と関連させた校内版「イングリッシュ・シャワー・プロジェクト」などが見られた。

A小学校やB中学校では、取組の開始に当たり、全校朝会で事業の目的や趣旨を説明し、教職員だけではなく、子どもにも、日々の取組を意識できるようにした。図3-17はその様子である。



図3-17 朝会で説明をするA小（左）とB中（右）の様子

A小学校では、校長が全校朝会で、具体物を示しながら子どもに説明を行った。また、B中学校では、英語科の担当教員が、校内でこれから始める取組について子どもに詳しく説明し、共通理解を図った。

②委員会活動・生徒会活動との連携

本事業は、委員会活動や生徒会活動と連携して、子どもの手で進めることも可能である。

C中学校では、教員が中心となって取組を立ち上げ、軌道に乗せてから、子どもを参加させる見通しをもって進めている。また、D小学校では、英語部会が企画した案を、委員会活動で子どもが検討し、その意見を反映させるなど、子ども主体の取組を推進している。

小中一貫校であるE中学校では、小学生の委員会活動で、特別教室のネームプレートを作成した。その様子を図3-18に示した。



図3-18 委員会活動の様子と完成したプレートの例

小学生は中学生のように、文字の読み書きができるわけではない。そのため、担当教員は、アルファベットの型紙をあらかじめ準備し、子どもに色をぬらせたり切らせたりして完成するように指示した。子どもたちは、アルファベットを並べると意味のある単語ができるという感覚を体験しながら取り組むことができた。

③ALTとの連携

京都市では、1学級につき年間平均16時間程度、ALTを配置している。そのため、ALTが来校する日

は、子どもたちにとって、生の英語に触れる貴重な時間となっている。ALTは通常、1日に4時間の授業をし、それ以外の時間を教材作成などに充てている。そこで、ALTに協力を依頼して、取組と一緒に進めたり、役割分担をしたりすることも考えられる。

図3-19にあるように、F小学校では、ALTの来校する日の中間休みに、月1回程度、ALTによる絵本の読み聞かせタイムを実施している。教員とALTが連携して選書や場の設定・進行を行っている。G中学校ではALTが、掲示コーナーを担当し、月替わりで、季節やテーマに合わせた英語表現を選び、掲示している。



図3-19 ALTによる読み聞かせ（左）や校内掲示（右）の例

④同僚性の構築

図3-20にあるように、H小学校では、教室名プレートを全校に掲示する前に、朝会で全教員がそれぞれ教室名を英語で紹介した。I小学校では、外国語活動主任を中心とした組織のもと、全校ゲーム大会を企画した。



図3-20 全校朝会での活動例

二校の取組に共通するのは、子どもが英語に興味をもてるように、教員間で計画やアイデアを練りながら進めている点と、全教員を巻き込みながら実施している点である。

（3）パイロット校・実践校における実践事例

パイロット校や実践校の小・中学校における特徴的な取組の実際を、枠内の五つの視点から紹介する。

- ①絵本の読み聞かせの実践事例
- ②英字新聞を活用したリスニングの実践事例
- ③音楽や映像から英語に慣れ親しむ実践事例
- ④効果的な校内環境の実践事例
- ⑤給食献立紹介の実践事例

①絵本の読み聞かせの実践事例（小学校）

J小学校では、英語絵本の読み聞かせについての教員研修を行った。外国語活動主任を中心に研修を企画し、図3-21にあるように、学級の子どもに読みたい絵本を一冊選び、どのように読むか、グループで話し合い、練習をして発表し合った。その後、全校で学級担任による絵本の読み聞かせタイムの実施につなげた。



図3-21 読み聞かせの研修（左）と読み聞かせタイムの様子（右）
そこで実際に見られた学級担任らによる読み聞かせの工夫を枠内に示した。

- ・電子黒板を使って絵本を拡大して示す。
- ・電子黒板で世界地図を見せ、社会科と関連付ける。
- ・オール・イングリッシュに挑戦する。
- ・劇のようにアレンジして聞かせる。
- ・難しい英語は追わず、絵に添って物語を展開する。
- ・物語の中に子どもを参加させる。

最初は、「英語が分からない」と言っていた子どもも、次第に学級担任の表情豊かな読み聞かせに引き込まれ、物語の世界を楽しみ、時折、覚えてのフレーズを声に出して言う姿が見られた。また、繰り返しのあるストーリーから、展開を予測しながら最後まで集中して聞き入る子どもの姿も見られた。

絵本の読み聞かせに決まった形が存在するわけではない。学級担任は、子どもの興味・関心や、理解のレベル、他教科との関連を熟知しており、実態に合わせたアレンジが得意であるという強みがある。それを生かし、研修で事前に準備を行ったことで、自信をもって子どもの前に立ち、子どもを引き付ける読み聞かせをすることができたといえる。

②英字新聞を活用したリスニングの実践事例（中学校）

K中学校では毎週2回、約5分間、全校一斉に「朝リスニング」を実施する。教科書以外の英語に触れさせることをねらう。文字を見せる前に、耳だけで聞かせることに重点を置き、継続して取り組む。主任を中心に教材を準備し、ALTが音声を担当し、全担任が指導と答え合せを担当する。リスニングの内容は、英語科教員間で連携し、授業で扱うこともある。毎回のプリント（A5判大）は、子

どもが各自ファイリングし、教員が定期的に点検している。図3-22にあるように、放送の指示に従って、まずはキーワードとなる単語を取り出して聞き、単語を2回ずつ声に出して言った後、本文を2回聞いて、空欄補充をしたり、聞き取った英語を書くディクテーションをしたりする。週の一回目で概要を把握し、二回目は情報を正確に聞き取ることをねらう。



図3-22 リスニングタイムでの子どもと担任の様子
教材作成をする上で、事業を担当する英語科教員が留意している点を枠内に示した。

- ・英字新聞からリスニングの話題を探す。
- ・記事を中学レベルに書き換え、ALTのネイティブ・チェックを受ける。
- ・子どもの負担を考え、本文は短めに、音声はゆっくりめに設定する。

K中学校では、全学年で一斉に、同じ音声を使って実施しているため、難易度や言語材料の指導時期に留意しながら、授業と関連させた取組を進めている。この取組を全教員で継続して取り組むことで、子どものリスニング力向上を目指している。

③音楽や映像から英語に慣れ親しむ実践事例（小学校）

L小学校では、年間計画に基づいて、朝学習と給食の時間に、歌や絵本から音声をインプットする取組を全校で行っている。図3-23のように、週1回の読み聞かせタイムでは、月替わりで絵本DVDを視聴する。

イングリッシュジャワプログラム						
★絵本の読み聞かせ・・・水曜の給食時間 13時～（放送委員の放送終了後）						
トラック 番号	The Balloon Animals	Five Little Ducks	Goody Goody Gumdrops!	Jack And Zak	Where's Sam?	Benji
① お話 （効果音あり）	2分52秒	4分	4分17秒	3分05秒	4分26秒	3分18秒
② お話 （効果音なし）	2分20秒	2分32秒	3分19秒	2分32秒	2分20秒	2分45秒
③ 歌	1分07秒	2分14秒	50秒	43秒	1分08秒	1分16秒
④ リズム読み	1分22秒	2分02秒	2分45秒	2分26秒	1分52秒	2分12秒

図3-23 絵本読み聞かせの計画例

子どもは物語を聞いて、出てくる英語をリズムに合わせて言ったり、歌ったりしていた。英語を全て理解できるわけではないが、映像から、内容を類推しながら理解していた。また、繰り返し聞いたり見たりすることで、音と意味がつながり、

理解が深められる。

さらに、同校では、図3-24のように、朝学習の時間に英語の歌を聞く活動をしている。

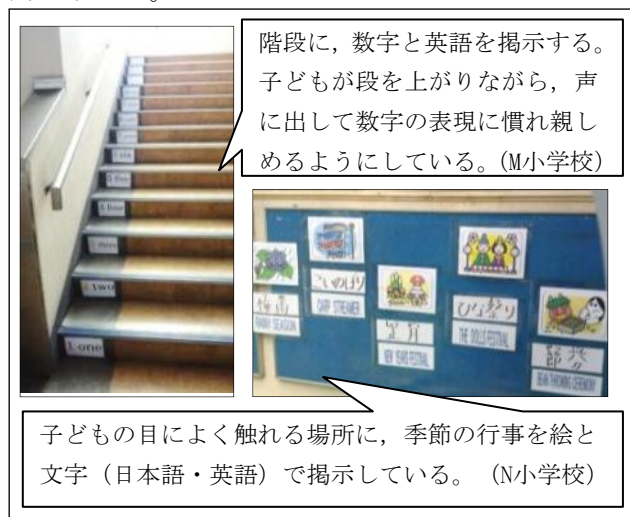


図3-24 歌に合わせて体を動かす子どもたちの様子

1回目は静かにCDを聞き、2回目は曲に合わせて歌う。体を動かすことを好む低学年の子どもは、速さを調節しながら、飽きることなく何度も口ずさんでいた。市販の音声教材や映像を効果的に活用しながら、毎日取り組む事例である。

④効果的な校内環境の実践事例（小・中学校）

聞く活動を通して英語に慣れ親しむほか、見る活動を通して英語に触れる取組として考えられるのが校内の英語掲示である。小学生は文字を全て理解しているわけではないが、文字に絵を添えて触れさせることで、子どもは、絵から類推して意味を理解しようとする。そこで英語への興味・関心が高まり、言語への気付きが起こると考える。そこで、子どもになじみのある表現に、それを表す絵や数字を添えて掲示している小学校の例を枠内に示した。



階段に、数字と英語を掲示する。子どもが段を上がりながら、声に出して数字の表現に慣れ親しめるようにしている。(M小学校)

子どもの目によく触れる場所に、季節の行事を絵と文字（日本語・英語）で掲示している。(N小学校)

いずれの取組も、外国語活動の授業と関連させて行うことが可能である。

次に、中学校では、子どもが英語の読み書きを学習している前提で、発達段階や難易度、授業との関連を考慮する必要がある。教科書以外の英語に触れ、読む環境を整えることが有効であると考え。右上枠内は、校内で子どもが積極的に英語を読む環境を作っている中学校の事例である。

ALTがコーナーを担当し、月替わりでテーマを決め、表現や自国の文化を紹介する。ALTは子どもにコメントを求め、双方向のコミュニケーションを図っている。(G中学校:前出)



The Spring Tournaments of Kyoto city have finished!

The spring tournaments of Kyoto city have finished and each team got a good prize. The soccer team won the first prize for the spring game and the girls kendo placed second as a team. Both the basketball team and the rugby team got third prize. We are very proud of every single one of you.



校門前の掲示版で、校内のニュースを英文と写真で紹介している。子どもにとって、自分に関わる出来事を英語で読む貴重な機会となっている。(O中学校)

⑤給食献立紹介の実践事例（小学校）

P小学校では、毎日、広報委員会の子どもが、校内放送で給食献立を英語で紹介している。月一回の委員会活動では、原稿を作り、リハーサルをする。子どもの負担にならないように、発達段階を配慮しながら、進めている。図3-25は原稿例である。

みなさん、こんにちは。今日は09月08日です。	Hello, everyone. Today is <u>Friday</u> , <u>8</u> <u>September</u> .
担当は、〇〇です。	This is <u>名前</u> speaking.
今日の給食は、	Today's lunch menu is ...
メニューを言う	⑤ <u>Break</u> <u>Soy</u> <u>Bean</u> <u>Soup</u> , ⑤ <u>White</u> <u>Rice</u> <u>with</u> <u>Chicken</u> <u>Broast</u> and ④ <u>Fruit</u> <u>Salad</u> .
説明を読む	② <u>Brown</u> <u>Rice</u> and ① <u>Milk</u> .
楽しい給食吧！ ありがとう。	Enjoy your lunch! Thank you.

図3-25 子どもが書いた給食献立の紹介原稿例

英語による毎日の放送は、子ども間に定着してきており、子どもからは、「今までAugustって聞こえたのに、今日からSeptemberに変わったね」と表現の変化に気付いたり、「玄米ごはんをbrown riceと言うのだね」と興味をもつ姿が見られるようになった。後期になって、委員会活動のメンバーの入れ替えがあり、英語の献立紹介に意欲をもって、委員会に入る子どもも見られた。

(4) 研究協力校における実践事例

①教室英語力向上研修の取組 (A小学校)

表3-4は、7月に実施したA小学校で実施した子ども対象の意識調査（抽出）の結果である。

表3-4 第一回児童質問紙調査の結果より (n=172) (%)

質問項目	とても そう思う	そう思う	あまり 思わない	全然そう 思わない
英語が好きである	43.0	37.8	16.9	2.3
英語が分からなくても最後まで聞く	58.2	27.3	12.2	2.3
英語がもっとできるようになりたい	68.9	20.5	5.3	5.3
将来英語は役に立つと思う	68.9	22.9	4.1	4.1

調査から、「英語が好きである」「英語が分からなくても最後まで聞く」「英語がもっとできるようになりたい」と答えた子どもは、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて80.0%を超えた。「将来英語は役に立つと思う」と答えた子どもは「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて91.7%で、英語に対して積極的に取り組もうとする姿勢が育っているといえる。それはA校が、早くから全校で英語に取り組んできた成果であろうと推察する。表3-5は、7月に実施した教員の質問紙調査結果である。

表3-5 第一回教員質問紙調査の結果より (n=18) (%)

質問項目	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
子どもは英語が好きである	41.2	47.1	11.8	0.0
子どもは英語への抵抗感がない	23.5	58.8	17.6	0.0
英語が好きである	22.2	38.9	38.9	0.0
英語への抵抗感がない	5.6	44.4	44.4	5.6

教員から見て「英語が好きである」「英語への抵抗感がない」子どもは「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて80.0%を超えた。その一方で、「英語が好き」「英語への抵抗感がない」教員は「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせてそれぞれ61.1%, 50.0%と、子どもよりも教員に、やや英語に抵抗のある様子がうかがえる。そこで、12月に第二回教員質問紙調査を実施した結果の抜粋を表3-6、図3-26に示した。

表3-6 教員が授業で話す英語の割合 (n=19) (%)

質問項目	0-24%	25-49%	50-75%	75-100%
授業で話す英語の割合の平均	38.1	47.6	14.3	0.0

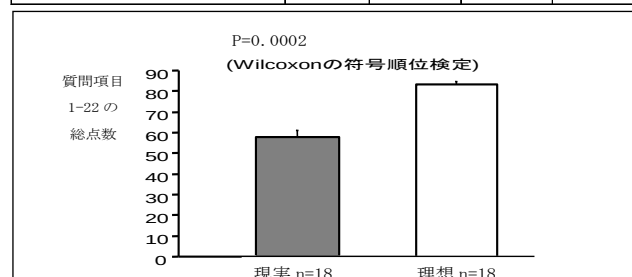


図3-26 教員が感じる教室英語の理想と現実のギャップ (n=18)

表3-6から、教員が授業中に英語を話す割合が半分以下という教員が85.7%を占めたことから、英語の使用率は多いとはいえないことが明らかになった。また、図3-26に示した通り、教室英語使用の理想と現実を調べたところ、理想 (82.83 ± 1.34) と現実 (57.11 ± 3.21) のギャップに有意差があった (n=18, P=0.0002, Wilcoxonの符号順位検定)。このことから、教員は「授業中に英語をもっと使いたい」あるいは「授業でもっと英語を使うべきだ」と考えていることがわかった。また記述回答には、「授業中、ゲームのルールなどの日本語で説明するほうが効果的な場合もある」との回答が多かった。まとめると、A小学校の教員は、オール・イングリッシュにこだわらないが、現在よりももっと教室英語を使って授業をしたいという意欲があることがうかがえる。

そこで、取組の一環として、校内で教室英語研修に取り組んだ。図3-27にあるように、職員朝礼後の5分や職員会議後の10分程度の時間を使った研修を計画した。

	回	月日	時間	目標
I	1	12/4	5	プレテスト・アンケート
	2	12/17	10	英語と日本語の違い ①音節
	3	12/17	10	英語と日本語の違い ②リズム
	4	12/19	10	英語と日本語の違い ③強弱とイントネーション
	5	12/19	10	英語と日本語の違い ④リンキング
II	6	1/22	10	子音① 2つの「シ」
	7	1/29	10	子音② p, t, k
	8	1/29	10	子音③ th, w
	9	1/29	10	子音④ r/ l
	10	1/29	10	子音⑤ ng, 鼻音, f/ v
	11	3/12	10	母音① 日本語との違い
	12	3/12	10	母音② 二重母音・曖昧母音
	13	1/15	10	授業を始める・終わる＋非言語の活用
III	14	1/21	10	ほめる
	15	1/26	5	コメントする
	16	2/6	5	子どもの理解を確認する
	17	2/20	5	指示をする①
	18	2/25	5	指示をする②
	19	3/12	5	指示をする③
	20	3/24	5	ポストテスト・アンケート

図3-27 A小学校で実施した「教室英語苦手克服講座」計画表

ファシリテーターは教員研修の前に、教室英語についての学習会をもち、テキスト（研究課で作成）や書籍、CDから学んだことを、研修で伝えるようにした。全20回の一部を、ALTと連携して進める。図3-28は学習会および研修の様子である。



図3-28 事前学習会（左）と校内研修会（右）の様子

A教諭のプレテスト（12月実施）は、s, shの発音の正答率は40.0%であったが、ファシリテーターを経験した後のポストテスト（2月）での正答率は100.0%であった。この結果から、A教諭は、これまで気に留めていなかった発音の違いに注意を向けることができるようになったといえる。なお、研修修了後にも検証を実施する予定である。

②多読の取組（B中学校）

B中学校では、シャワー事業の取組の一つとして多読タイムを実施している。表3-7は、全校の子どもを対象に行った意識調査である。

表3-7 英語に関する全校意識調査結果より (n=345) (%)

質問内容	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
英語は好きである	20.1	36.6	32.8	10.5
英語に自信がある	5.5	24.4	45.3	24.7
英語がもっとできるようになりたい	56.9	30.9	7.5	4.6
英語を読んでほしい理解できる	16.3	39.1	36.2	8.5

英語が好きな子どもは56.7%であるが、英語に自信がある子どもは29.9%と多いとはいえない。英語を読んでほしい理解できる子どもが55.4%いる一方で、理解しにくい子どもは少なくない。しかし、「英語をもっとできるようになりたい」と87.8%の子どもが答えるなど、前向きに英語に向き合おうとする姿が明らかになった。

この実態を踏まえて学校は、毎日子どもが教科書以外の英語に触れることで、読む力が高まるであろうと考え、多読の取組を実施している。英語科が中心となり、学校全体で共通理解を図った。また朝会や通信（English Showerだより）を通して子どもに対しても目的や方法を周知した。取組の概要を枠内に示す。

- ・毎日の昼休憩（5分間）で取り組む。
- ・書籍は三種類（簡単・普通・難しい）に分け、各教室に置く。
- ・読後、ワークシートに語数を記録する。
- ・英語係（子ども）が書籍の回収や運搬を担当する。

図3-29は、一学級分の多読教材とワークシートである。ワークシートは、2週間で8千語を読破した中学2年生のものである。右上図3-30は多読の取組の様子である。



図3-29 一学級分の多読教材と総語数記録用ワークシートの例



図3-30 B中学校の多読の取組の様子

子どもには「30万語を読破すると、すらすらと読めるようになる」と説明し、読んだ語数分だけワークシートに色を塗り記録をさせている。総語数が増えていくことで、達成感を感じながら継続していけるように工夫している。

また、事前調査を実施し、子どもが初めて読む英文をどれだけの速さで読めるか、内容理解が伴っているか調べた結果を表3-8に示した。

表3-8 B中学校の事前調査結果

項 目	中学1年生 (n=32)	中学2年生 (n=99)
1分間に読める語数（語）	51.4	83.4
内容理解を問う問題①の正答率（%）	87.5	56.6
内容理解を問う問題②の正答率（%）	93.8	89.9

1分間に読める語数平均は、中学1年生で51.4語、中学2年生で83.4語で、中学2年生のほうが、1分間に読める速さが速いことがわかる。正答率は56.6%から93.8%まで幅広い結果となった。中学1年生と中学2年生で調査用の英文問題は異なるため、比較はできないが、定期的に読みの速さや正確さを測ることで、子どもが自分の伸びを可視化し、多読へのモチベーションにつなげられるようにした。

行動観察から、教科書以外の英語の本を手にするのが初めてという子どもが、興味をもって本を手に取り、読んでいた。中学1年生に比べて、読む速さが速く、語彙が身に付いている中学2年生では、集中する時間が長い様子が見られた。また、声に出して読もうとする子どもも見られた。なお、この取組は開始から日が浅いため、今後、取組の成果と課題について検証をする予定である。

第4章 事業のさらなる充実を目指して

第1節 事業の成果と課題

今年度は、事業体制を整えるとともに、プロジェクト・プランを作成して情報を提供し、パイロット校・実践校の支援を行ってきた。本節では、パイロット校の管理職対象に行った質問紙調査の結果から、学校体制づくり、取組の進捗状況や指

導者・子どもの変容の点から、成果と課題を考察する。表4-1は、管理職対象に行った事前調査（6月）と中間調査（12月）の比較である。そこから各校の体制づくりについて考察する。

表4-1 事前調査と中間調査の比較（n=17）（%）

調査月	質問項目	よくあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
6月	（英語科以外の）教職員の協力を得て共通理解のもと、本事業に取り組みたい	62.5	37.5	0.0	0.0
12月	（英語科以外の）教職員の協力を得て共通理解のもと、本事業に取り組んでいる	41.2	52.9	5.9	0.0
6月	時間を決めて継続した取組を行いたい	62.5	37.5	0.0	0.0
12月	時間を決めて継続した取組を行っている	41.2	58.8	0.0	0.0
6月	日常的に英語に触れる校内環境をつくりたい	75.0	25.0	0.0	0.0
12月	日常的に英語に触れる校内環境をつくっている	47.1	52.9	0.0	0.0

まず、6月調査では、各小・中学校の取組体制のビジョンを尋ねた。「教職員の協力を得て、共通理解のもと、本事業に取り組みたい」「時間を決めて継続した取組を行いたい」「日常的に英語に触れる校内環境をつくりたい」と考える管理職はいずれも「よくあてはまる」「あてはまる」を合わせて100.0%であった。続いて、12月調査から、「教職員の協力を得て、共通理解のもと、本事業に取り組んでいる」学校は94.1%、「日常的に英語に触れる校内環境をつくっている」「時間を決めて継続した取組を行っている」と回答した学校は100.0%であった。

表4-2 中間調査の結果より（n=17）（%）

質問項目	よくあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
当初の計画通りに本事業を進められている	17.6	70.6	11.8	0.0

表4-2から、88.2%の小・中学校が、当初の計画通りに事業を進められていると回答している。

これらの結果から各校は、管理職のリーダーシップのもと、学校体制で、時間を決めて継続的に取り組み、日常的に英語に触れる校内環境づくりを進めていることがわかる。また、管理職が描いたビジョン通りに、おおむね計画的に取組が進行中であることが明らかになった。

次に、小・中学校の取組の概要について検証する。小学校でどのような取組を実施しているかについて、図4-1にまとめた。

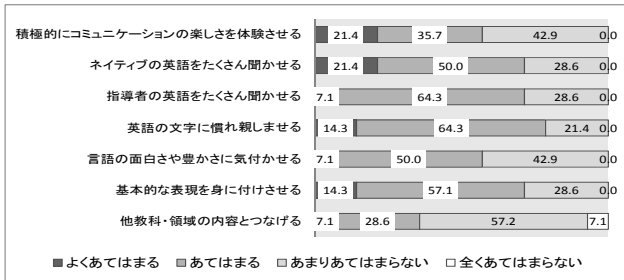


図4-1 中間調査（小学校で実施した取組）(n=14)（%）

上記の結果から、小学校では「英語をたくさん

聞かせる取組」「文字に慣れ親しませる取組」「基本的な表現を身に付けさせる取組」を中心に進めていることが明らかになった。また、外国語活動の目標にある「コミュニケーションの楽しさを体験させる」「言語の面白さや豊かさに気付かせる」ことを意識しつつも、取組の中心とはせず、あくまでもインプット中心の取組を実施していることがわかった。また、他の教科・領域との連携を行っている学校が36.0%であったことから、連携を意識した取組は、あまり積極的に行われていないことが明らかになった。

その理由として、学校が取組を実施する時間帯は、朝や昼休みなどの短時間が多いことから、授業との連携を意識して取り組むことが難しいからではないかと考える。これはすなわち、短時間であっても、インプットの取組は比較的实施しやすいことを示している。

続いて、パイロット校の中学校では、どのような力をつける取組を実施したかについて中間調査の結果からまとめると、「聞く力をつける」「読む力をつける」取組を実施している学校が「よくあてはまる」「あてはまる」を合わせて100.0%であった。話す力を付ける取組は66.7%、書く力を付ける取組は33.3%であった。これらの結果から、各校の取組は、「聞く・読む」のインプットが中心で、「話す・書く」といったアウトプットの活動を意識しながらも、目標はインプットに絞っていることが明らかになった。

さらに、「取組と授業を連携させ、学力向上を目指した取組を実施している」中学校は、合わせて100.0%であった。このことから、各中学校は、普段の授業と連動させた取組を意識して実施していることがわかる。

続いて事業を通した指導者の変容、子どもの変容について、パイロット校の小・中学校の中間調査（12月）の結果の抜粋を表4-3に示した。

表4-3 中間調査(子どもや指導者の変容の有無) (n=17)

質問項目	よくあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
指導者に何らかの変容が見られた	35.3	64.7	0.0	0.0
子どもに何らかの変容が見られた	29.4	64.7	5.9	0.0

調査結果から、「指導者に何らかの変容が見られた」について、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した割合は100.0%であった。また、「子どもに何らかの変容が見られた」について、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答した割合は94.1%であった。これらの結果から、指導者にも子どもに

も、変容が見られたことが明らかになった。記述回答を枠内に示した。

(指導者の変容)

- ・主体的に進めようとする姿勢が見られるようになった。
- ・子どもに取組を意識させる声かけをするようになった。
- ・英語への興味・関心が高まり、積極的に英語を使うようになった。
- ・授業にスムーズにとりかかれるようになった。
- ・手法について工夫する態度が見られるようになった。
- ・生徒の英語力育成を学校全体で意識するようになった。

(子どもの変容)

- ・英語の掲示物に興味を示し、声に出して言うようになった。
- ・簡単な挨拶等を英語で返せる子どもが増えてきた。
- ・英語の歌に興味をもち、歌ったり声に出したりするようになった。
- ・給食時の英語放送を理解している子どもが増えた。放送を通して、自信をもって上手に話す子どもが増えてきた。
- ・関心をもって英語の歌を聴く生徒が増えた。
- ・英語を上手に使うモデルとなる生徒の姿を見て、英語に対するモチベーションが上がってきている。

記述回答から、指導者である教員の英語に対する興味・関心が高まり、英語に対する積極性が見られるようになってきたことが、取組への主体性・積極性となって表れていると考えられる。また、取組を継続していくうちに、英語を積極的に使う子どもが増えてきている。

このことから、取組を通して、英語に関する子どもの興味・関心が高くなってきているといえる。ある小学校では、開始時には難易度に配慮しながら、インプット中心の取組を進め、後期からは子どもの様子を見ながら、取組の形態を一部変更し、子どもがアウトプットする機会をつくるなどの工夫をしている。

以上のように、各校では、目標を設定し、目指す姿に向け、個性豊かな取組を主体的に進めることができた。その過程で、指導者に変容が見られ、それが子どもの変容につながったと考えられる。

続いて課題について、12月に実施した中間調査の結果を表4-4と右上枠内にまとめた。

表4-4 中間調査（パイロット校の困りや悩み、要望の有無）（n=17）（%）

質問項目	よくあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
事業を進める上での困りや悩みがある	0.0	47.1	52.9	0.0
次年度、本事業への要望がある	0.0	47.1	52.9	0.0

(実施上の困りや悩み)

- ・時間の確保がしにくい。（取組の共通理解、指導者の研修）
- ・教員により取組に温度差がある。
- ・全校で取り組む活動内容の吟味や開発を進める必要がある。
- ・部会を中心とした組織の強化を図る必要がある。

(次年度への要望)

- ・単年度ではなく、継続して事業に取り組みたい。
- ・情報交流会の開催
- ・予算の確保（多読用図書、絵本、研修）
- ・発達段階を踏まえ、日常的に聞かせたい英語の具体を示してほしい。

各校は、本事業以外にも、多くのことを抱えつつ、日々の教育活動を進めている。事業を運営・実施するための時間確保は、各校に委ねられており、時間の捻出は課題であるといえる。

子どもの発達段階に応じた良質な英語インプットを継続的に行うことが必要であることは先にも述べた。特に小学校段階では、全校一斉の取組を進めていきながらも、その内容や扱う表現が、各学年の発達段階に適したものであるかどうか、今一度、精査する必要がある。

また、事業を継続していくためには、取組に対して、教職員間の意思統一を図り、子どもの発達段階を踏まえた内容を吟味して進めることも、今後よりいっそう求められるであろうと考える。

第2節 今後の発展的可能性と展望

本事業が3年次を迎える次年度、どのように事業を継続・進化・発展させていくべきであろうか。

枠内に示した五つの視点から、この事業の今後の可能性を探る。

- ①国や市の今後の英語教育改革の動きから
- ②英語教育の課題から
- ③子どもの発達段階から
- ④On the Job Training (OJT) の視点から
- ⑤学校を支える視点から

①国や市の今後の英語教育改革の動きから

2020年に向け、小学校では、中学年以上の学級担任が英語の指導に携わることになる。中学校では、小学校の教科化を受けて、現在よりも高度な内容を取り扱い、四技能の統合的な育成を目指す。

そうした国の動きに対応しつつ、本市では、「京都の伝統文化を英語で海外の人々に発信できる実践的英語力の育成」を目指す。今年度、本事業では、京都ならではの伝統文化や食育などを取り入

れ、インプット中心の取組を進めてきた。

そこで将来的には、先述の目標を達成するために、質の高いインプットに多く触れる機会を継続的に作りながら、段階的なアウトプットの機会を確保することを目指していきたいと考える。自分のことや身の回りのこと、さらには京都の伝統文化について英語で発信できる子どもを育てるために、インプットの成果をアウトプットで評価する取組を視野に入れて進める必要がある。

さらに、本事業を、教員が教育内容の高度化に対応できる指導力・英語力を磨くためのステップとしてとらえ、取組を進める視点をもつことが大切であると考ええる。

②英語教育の課題から

本事業は、全学年の子どもを対象とした取組である。そこで、日常的なモジュールの取組と位置付けて実施することも考えられる。国が示したモジュールの例⁽⁴³⁾を参考に、時間の枠組みを設定して行い、子どもがスパイラルに表現に出合えるように授業と連携して実施することが効果的であると考ええる。

短い時間でも、継続して計画的に取り組むことで、これまで英語に触れる機会の少なかった学年の子どもに、その機会を提供し、中学年から始まる英語の準備段階とすることも、可能性として考えられる。

また、本事業を、教員の取組ととらえることも考えられる。将来的に、英語を学ぶ学年が拡充される小学校では、教員の外国語活動の指導力・英語力の向上は喫緊の課題である。したがって本事業を、子どものための取組というだけでなく、教員のための取組でもあるととらえ、英語力向上のための研修の機会とすることも考えられる。研究協力校では、ファシリテーターが中心となって行った校内研修の取組から、教室英語力の向上を目指した取組の可能性も探ることができた。

パイロット校ではこの一年間、各校の実態や課題を踏まえた取組を計画して実践・交流し、検証を行ってきた。今後は、パイロット校や実践校など京都市全ての小・中学校で、本事業を自立した取組へと発展させていくことが期待される。

③子どもの発達段階から

今年度、全校一斉の取組に一步踏み出した学校は、今年度の計画を見直し、次年度、さらに内容の充実を図っていくことが重要であると考ええる。

小学校段階では、子どもの興味・関心、難易度、各教科・領域との関連などを考慮して、発達段階に応じ、計画を細分化していく必要がある。

また、中学校段階では、モジュールや課外の時間を効果的に活用し、聞く・読む活動を中心に、日常的にインプット量を確保することを提案する。その上で、本事業と授業と連動させて進めるようにする。インプットされた内容を、インテイクの段階へとつなげる指導を行うとともに、教科書以外の英語に継続的に触れ、それを授業で確かめるというサイクルを経ることで、さらなる相乗効果を生み出すことが期待できると考える。

④On the Job Training (OJT) の視点から

多忙を極める小・中学校の教員が、頻繁に研修に参加することは難しい状況がある。

また、小学校の外国語活動は、導入から年が浅いため、ベテラン教員が若手教員に次第送りすることが、困難な面がある。

そこで、学校組織の中で、日常的に取組を進めていくために、OJTの視点でも特に、同僚性を意識した体制づくりと事業運営を提案する。校内で、同僚性を構築して取組を進めながら、情報や教材の共有化を図り、年度ごとに事業を振り返り、よりよい取組を目指すことが求められる。そして教員同士が主体的に学び合い、高め合おうとする意識の醸成を図っていく必要がある。

今後、小学校では、教員が英語に対して苦手意識を感じていたとしても、自己成長への意欲をもち、必要な知識や取組の視点を共通理解し、他の教員と協力して実践し、指導力・英語力の向上につなげることが求められるであろう。

さらに、中学校では、英語科の教員を中心に、他教科の教員も手を携えて組織的に取組を進めることが求められるであろうと考える。

⑤学校を支える視点から

学校の取組を支える委員会は、各校が主体的に取り組めるように支援をするとともに、全市の取組を俯瞰して、事業を進めていく必要がある。

そこで、各校の教材の共有化を提案する。今年度は、研究課が中心となって、総合教材ポータルサイトを通して、教材や指導案を発信し、取組の交流を図ってきた。今後は総合教材ポータルサイトを活用して、全市の学校間で、教材や情報の共有や常時交流を行うことを提案する。そうすることで、本事業が持続可能なものとなり、さらなる

質的充実と発展が期待できると考える。

(43)文部科学省『小学校5・6年生におけるモジュール授業を用いた時間割の例 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf 2015.

3.3

おわりに

「2011年度に小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう(44)。」これは、米デューク大学の研究者であるキャシー・デビッドソン氏が2011年8月にニューヨークタイムズ紙のインタビューで語った予測である。この数字はアメリカでの予測であるため、日本でも同じようになるかどうかはわからない。ただ、グローバル化が進む世界では、一つの国で起こった変化は、瞬く間に他の国にも広がることが考えられる。

同じく、2011年度に小学校で外国語活動が必修化され、翌年には中学校の英語の時間数が週4時間となった。その後も改革は続き、2013年には、2020年の完全実施を目指して、小学校英語の教科化や、中学校・高等学校の指導内容の高度化の指針(45)が示されて現在に至る。

冒頭の子どもたちが、大学に入学するのは教科化の年からたった7年後の2027年である。目の前の子どもたちが、大人として生きる社会はどうなっているであろうか。現在よりも更にグローバル化が進み、国境という概念が薄れていくであろう。日本の国の中でも、言語や文化の異なる人々と、主体的に協働していくことが求められるであろう。多様化した、変化の激しい社会の中を生き抜いていくために必要な資質・能力の一つとして、英語教育は欠かせないものであると考える。学校教育においては、グローバル社会で求められる力の育成を目指して取り組んでいかねばならない。

しかし、どのような時代にあっても、人と人との、言葉を通して関わり合い、折り合いをつけながら生きていくことに変わりはないであろうと考える。

If we want to remove some of the barriers, that exist, the language we use is a powerful tool.

(46)

自立した一人の人間として、意欲をもって新しい価値を創造し、未来を切り開いていくためには、

自己と他者との間の異なる価値観や意見のすり合わせも時には必要であろう。困難は伴うが、言葉はそれを解決できる手段となるはずである。そして、一人よりも、仲間とともに何かを成し遂げたことは、何物にも代えがたい体験となり、自信につながるに違いない。

イングリッシュ・シャワー事業はパイロット校や実践校の日々の実践の上に成り立つ一大プロジェクトである。私たちは教師として、この事業を通して、子どもの未来に向けた種まきをしていきたいと考える。

最後に、研究協力校の向島中学校、高倉小学校をはじめ、パイロット校、実践校の教職員の方々に心より感謝の気持ちを表したい。

(44)Virginia Heffrenan (2011) The New York Times. <http://opinionator.blogs.nytimes.com/2011/08/07/education-needs-a-digital-age-upgrade/> 2015.3.3

(45)前掲 (1)

(46)Jacqueline Barnfield *et al.* (1992:54). cited from Bain, R., Fitzgerald, B. and Taylor, M. (eds). (1992). Looking into language: Classroom approaches to knowledge about language. London: Hodder & Stoughton.